

※宮崎県教委1996を改変・掲載

第101図 高岡麓遺跡の建物跡

の記憶であり、また度重なる改築も想定されることから、必ずしも聞き書きの内容どおりに当てはめることができず、遺構配置などを勘案して調整を行ったため、あくまで一つの復元案としておきたい。

そのためか細かな検討をするとイレギュラーな部分も見受けられるようであるが、建物の規模や部屋数および配置などが大きく変わる可能性は低いと考えられる。

これを宮崎市高岡町の高岡麓遺跡で検出された屋敷の復元図と比較してみると実によく似ることが分かる。ちなみに高岡麓例は鹿児島藩の郷土屋敷と推定されている。

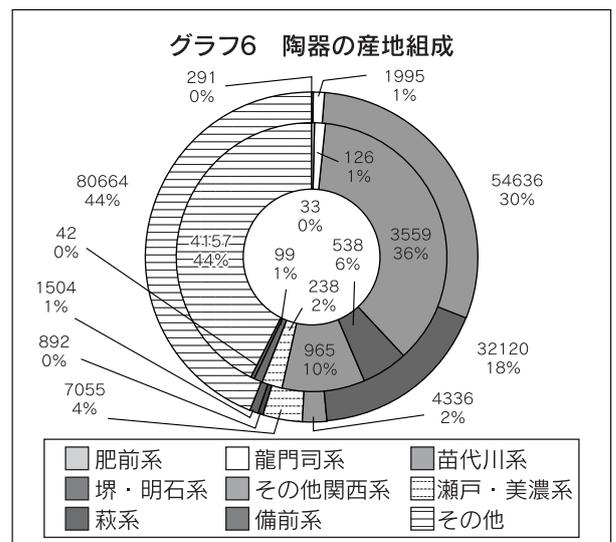
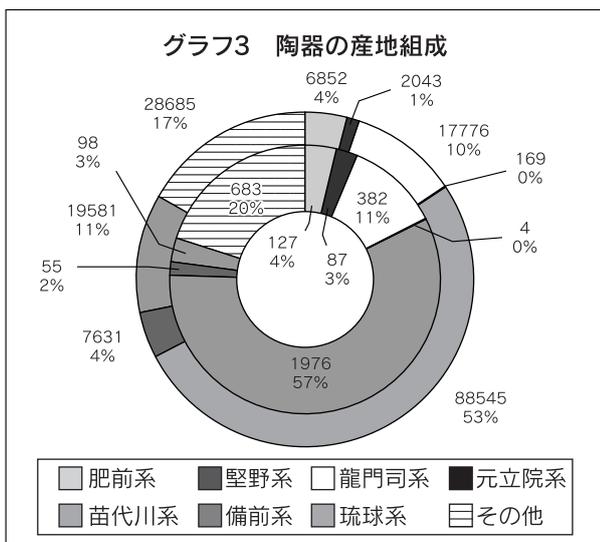
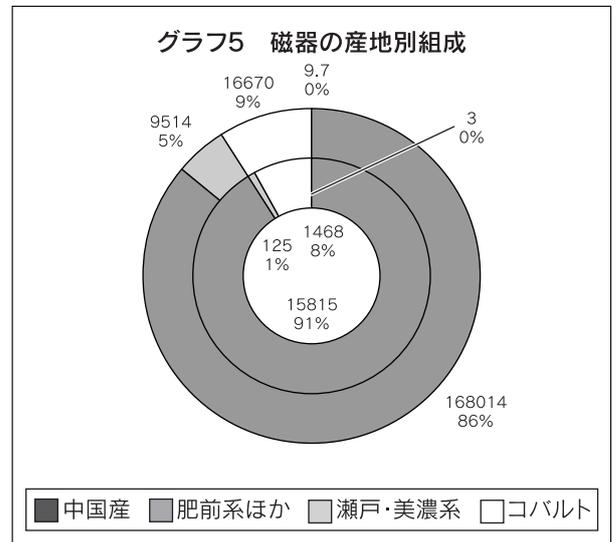
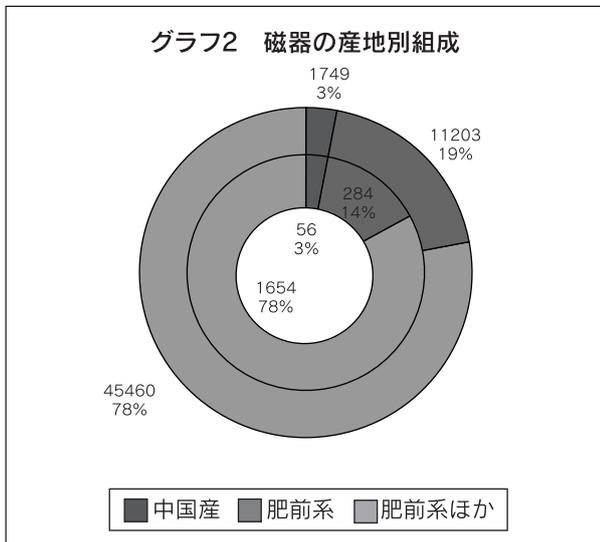
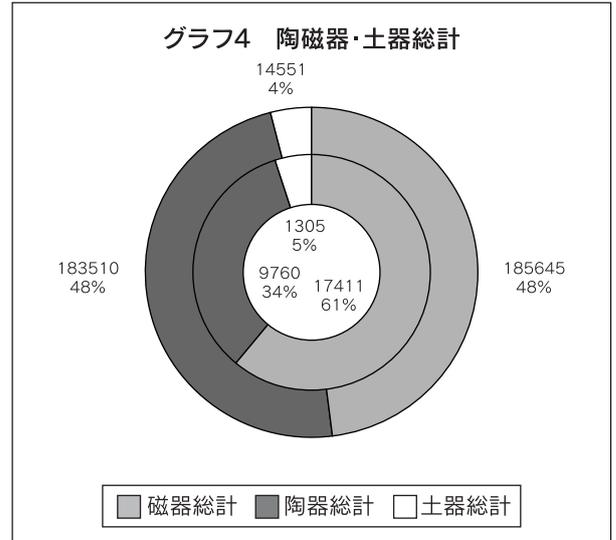
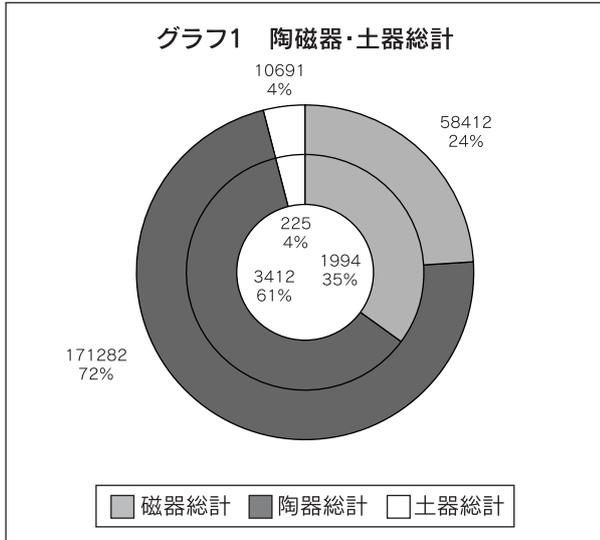
また出土遺物について振り返るならば、紅の容器をはじめとする化粧道具や装身具が目立っており、着飾った女性の存在を想定した。「紅一匁金一匁」とも称されたように紅は非常に高価であったため、これをふんだんに使い得たとするならば、かなりの

財力が背景に暗示される。

その他に文房具の類が多く、筆記具を携行する人物がいたことも推測された。屋根瓦には家紋が入り、近世後半期に高さ2.5mにも達する石垣を築くことができたという点からも、藩政に深く関わる人物の可能性はある。

土笛や人形、さらには掲載できなかったがミニチュアのままごと用具もあり、これらからは子供の姿も見えてこよう。

この他にも金工・木工など様々な細工に関わる用具が出ており、あまりの多様さに情報を消化しきれていないのが正直なところである。調査報告書としてはそこまで言及することができなかったが、遺跡に関わった者の責務として、今後も検討を進めていきたいと考える。



左：八幡遺跡（都城市）

右：野首第1遺跡（高鍋町）

第102図 陶磁器組成の比較

※グラフの内側は点数、外側は重量（g）

引用・主要参考文献

【論文・著書等】

- 青山幹雄 1994 『佐土原土人形の世界』 鉦脈社
- 浅川滋男・箱崎和久編 2001 『埋もれた中近世の住まい』奈良国立文化財研究所シンポジウム報告 同成社
- 新垣 力・瀬戸哲也 2005 「沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理」『紀要 沖縄埋文研究』
3 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 石川悦雄 1984 「宮崎平野における弥生土器編年試案 素描 (Mk. II)」『宮崎考古』第9号 宮崎考古学会
- 岩切悦子 1984 「高鍋鉄道株式会社」の消長 (一)『史友会報』第20号 高鍋史友会
- 岩切悦子 1985 「高鍋鉄道株式会社」の消長 (二)『史友会報』第21号 高鍋史友会
- 岩切悦子 1986 「高鍋鉄道株式会社」の消長 (三)『史友会報』第22号 高鍋史友会
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
- 遠部 慎 2004 「焼成前穿孔土器から見た下剥峰式土器」『九州縄文時代早期研究ノート』第2号 九州縄文時代早期研究会
- 角谷江津子 2005 「京「小町紅」 文献と出土資料から」『江戸時代の名産品と商標』江戸遺跡研究会第18回大会発表要旨 江戸遺跡研究会
- 金丸武司 2004 「宮崎における縄文時代早期前半期の土器群」『宮崎考古』第19号 宮崎考古学会
- 重留康宏 2002 「縄文時代早期末の条痕文土器 (予察)」『宮崎考古』第18号 宮崎考古学会
- 重留康宏 2004 「前原西式土器雑考」『九州縄文時代早期研究ノート』第2号 九州縄文時代早期研究会
- 白神典之 1988 「堺摺鉢について」『堺環濠都市遺跡 (SKT79号地点) 発掘調査報告』堺市文化財団調査報告第37集 堺市教育委員会
- 角田三郎 1981 『宮崎の民家』鉦脈叢書9 鉦脈社
- 永井哲雄 2006 『遙かなる江戸への旅 日向国諸大名の参勤交代』 鉦脈社
- 西本豊弘・松井 章編 1999 『考古学と動物学』考古学と自然科学2 同成社
- 増田一裕 1995 「飛鳥時代須恵器の編年にかかる追試作業」『土曜考古』19号 土曜考古学
- 三隅郁代 1982 「祖母より聞いた西南の役の話」『史友会報』第18号 高鍋史友会
- 向井 互 2003 「タイ黒褐釉四耳壺の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.23 日本貿易陶磁研究会
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会

【資料集等】

- 関西陶磁史研究会 2001 『近世信楽焼をめぐって』研究集会資料集
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念
- 九州縄文研究会 1998 『九州の押型文土器』論攷編
- 九州縄文研究会 2003 『縄文時代の集石遺構と炉穴』発表要旨・資料集
- 第5回九州前方後円墳研究会実行委員会 2002 『古墳時代中・後期の土師器 その編年と地域性』
- 中近世備前焼研究会 2000 『第3回中近世備前焼研究会資料』(付第1回・第2回研究会資料)
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (1)』東京大学構内遺跡調査研究年報2別冊
- 兵庫県埋蔵文化財調査室 1996 『日本出土陶磁器』1996年版

ふるさとを伝える会・高鍋町教育委員会 『たかなべ 伝・伝』

南九州縄文研究会 2002 『南九州貝殻文系土器Ⅰ』南九州縄文集成1

南九州縄文研究会 2003 『南九州貝殻文系土器Ⅱ』南九州縄文集成2

【報告書等】

川南町教育委員会 1983 『川南町の埋蔵文化財』遺跡詳細分布調査報告書

木城町教育委員会 1998 『町内遺跡詳細分布調査報告書』木城町文化財調査報告書第5集

清武町教育委員会 2004 『須田木遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書第12集

熊本県教育委員会 1996 『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財調査報告第158集

熊本市教育委員会 2002 『つつじヶ丘横穴群 発掘調査報告書』

桂川町教育委員会 1989 『土師地区遺跡群Ⅷ』桂川町文化財調査報告書第11集

郡山町教育委員会 2003 『湯屋原遺跡』郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

新富町教育委員会 2001 『町内遺跡17』新富町文化財調査報告書第31集

高鍋町教育委員会 1988 『高鍋の武家屋敷と民家』高鍋町の文化財第7集

高鍋町教育委員会 1989 『高鍋町遺跡詳細分布調査報告書』高鍋町文化財調査報告書第4集

東北歴史資料館 1984 『里浜貝塚Ⅲ』東北歴史資料館資料集9

東北歴史資料館 1985・1986 『里浜貝塚Ⅴ・Ⅵ』東北歴史資料館資料集15・19(合冊)

宮城県教育委員会 1986 『田柄貝塚』宮城県文化財調査報告書第111集

宮崎県教育委員会 1996 『高岡麓遺跡』

宮崎県教育委員会 1998 『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅰ』

宮崎県教育委員会 1999 『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』

宮崎県埋蔵文化財センター 2004 『野首第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第86集

宮崎県埋蔵文化財センター 2005 『尾花坂上遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第101集

宮崎県埋蔵文化財センター 2005 『崩戸遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第103集

宮崎市教育委員会 1986 『蓮ヶ池横穴群 保存整備事業概報Ⅰ』(昭和60年度計測調査概報)

【県史・市町村史】

川南町 1983 『川南町史』

宮崎県 1998 『宮崎県史』通史編中世

I. 野首第1遺跡における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SI 6, 集石遺構	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.2	SI 8-3, 集石遺構	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.3	SI35-5, 集石遺構	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.4	SI23-1, 集石遺構	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.5	SI24-6, 集石遺構	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.6	SI26, 集石遺構	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.7	SI26-13, 集石遺構	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.8	SI32-4, 集石遺構	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.9	SI35-8, 集石遺構	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.10	SI36-19, 集石遺構	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.11	SA1d, 土師器?付着	炭化物	酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.12	NK1W-894, 低湿地	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.13	NK1W-945, 低湿地	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.14	SX 2-573, 竪穴住居跡	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.15	SX 3サブトレ, 不明遺構	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No.16	NK1W-464-3, 低湿地	木製品 (扇)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.17	ノクピ1-1, 低湿地	木製品 (碗)	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

2. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	¹⁴ C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代 (西暦) (1 σ :68%確率, 2 σ :95%確率)
No. 1	212394	7550 \pm 50	-26.5	7530 \pm 50	交点: cal BC 6410 1 σ : cal BC 6430~6380 2 σ : cal BC 6450~6250
No. 2	212395	7810 \pm 50	-25.6	7800 \pm 50	交点: cal BC 6630 1 σ : cal BC 6660~6580 2 σ : cal BC 6700~6490
No. 3	212400	8240 \pm 60	-26.5	8220 \pm 50	交点: cal BC 7280, 7230, 7190 1 σ : cal BC 7330~7100 2 σ : cal BC 7460~7070
No. 4	212397	8280 \pm 50	-26.3	8260 \pm 50	交点: cal BC 7320 1 σ : cal BC 7430~7420, 7350~7190 2 σ : cal BC 7470~7100
No. 5	212398	8650 \pm 50	-26.3	8630 \pm 50	交点: cal BC 7600 1 σ : cal BC 7630~7590 2 σ : cal BC 7750~7580
No. 6	214201	8300 \pm 40	-26.2	8280 \pm 40	交点: cal BC 7330 1 σ : cal BC 7450~7400, 7360~7300 2 σ : cal BC 7470~7180
No. 7	212399	8360 \pm 50	-26.2	8340 \pm 50	交点: cal BC 7460 1 σ : cal BC 7500~7340 2 σ : cal BC 7530~7300
No. 8	212400	8670 \pm 40	-25.4	8660 \pm 40	交点: cal BC 7610 1 σ : cal BC 7720~7600 2 σ : cal BC 7760~7590
No. 9	212401	7720 \pm 40	-27.8	7670 \pm 40	交点: cal BC 6470 1 σ : cal BC 6500~6450 2 σ : cal BC 6580~6440
No.10	212402	8300 \pm 40	-25.9	8290 \pm 40	交点: cal BC 7340 1 σ : cal BC 7450~7390, 7370~7310 2 σ : cal BC 7480~7190
No.11	212403	2070 \pm 40	-25.4	2060 \pm 40	交点: cal BC 50 1 σ : cal BC 110~30 2 σ : cal BC 180~AD 30

試料名	測定No. (Beta-)	¹⁴ C年代 (年BP)	δ ¹³ C (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代 (西暦) (1σ:68%確率, 2σ:95%確率)
No.12	212404	710 ±40	-26.8	680 ±40	交点: cal AD 1290 1σ: cal AD 1280~1300 2σ: cal AD 1270~1320, 1340~1390
No.13	212405	910 ±40	-24.6	920 ±40	交点: cal AD 1060, 1080, 1150 1σ: cal AD 1030~1180 2σ: cal AD 1020~1210
No.14	212406	1280 ±40	-27.1	1250 ±40	交点: cal AD 770 1σ: cal AD 700~790 2σ: cal AD 680~880
No.15	212407	3680 ±40	-28	3630 ±40	交点: cal BC 1270 1σ: cal BC 2030~1940 2σ: cal BC 2130~2080, 2060~1890
No.16	217855	1040 ±50	-26.3	1020 ±50	交点: cal AD 1010 1σ: cal AD 990~1030 2σ: cal AD 910~920, 960~1060, 1080~1150
No.17	217856	950 ±40	-23.2	980 ±40	交点: cal AD 1030 1σ: cal AD 1010~1040 2σ: cal AD 990~1160

(4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。

calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。INTCAL98では、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1^{シグマ} (68%確率) と2σ (95%確率) は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

Ⅱ. 野首第1遺跡における樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、集石遺構、低湿地、不明遺構から出土した炭化材10点、および近世土坑から出土した桶1点の計11点である。試料の詳細を表1に示す。

3. 方法

木材については、カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。炭化材については、試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 図版1

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示す。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には2本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 図版2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 図版3

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで、

晩材部の幅は狭い。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で1～10細胞高である。

以上の形質よりコウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱、耐朽、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版4

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～3列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クスギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 図版5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～3列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クスギ節に同定される。コナラ属クスギ節にはクスギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靱で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

ブナ科 *Fagaceae*

横断面：部分的ではあるがやや大型の道管が見られる。放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織が見られる。

以上の形質よりブナ科のコナラ属コナラ節、コナラ属クスギ節、コナラ属アカガシ垂属のいずれかである。本試料は小片で保存状態が悪く広範囲の観察ができないことから、ブナ科の同定にとどめた。

クスノキ科 *Lauraceae* 図版6

横断面：中型から小型の道管が単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロタモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は炭化などの影響で不明瞭な点が多いことから、クスノキ科の同定にとどめた。なお、道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

広葉樹 *broad-leaved tree*

横断面：道管が存在する。放射断面：道管と放射組織が存在する。接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。本試料は保存状態が悪く広範囲の観察が困難であることから、広葉樹の同定にとどめた。

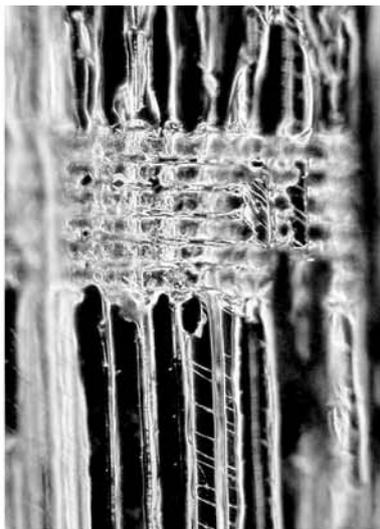
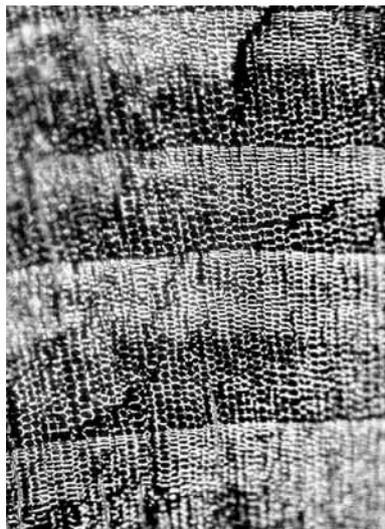
5. 所見

分析の結果、集石遺構の炭化材はコナラ属コナラ節4点、コナラ属クスギ節1点、カヤ1点、ブナ科1点と同定された。また、低湿地の炭化材はコウヤマキとクスノキ科、不明遺構の炭化材は広葉樹、近世土坑から出土した桶はスギと同定された。

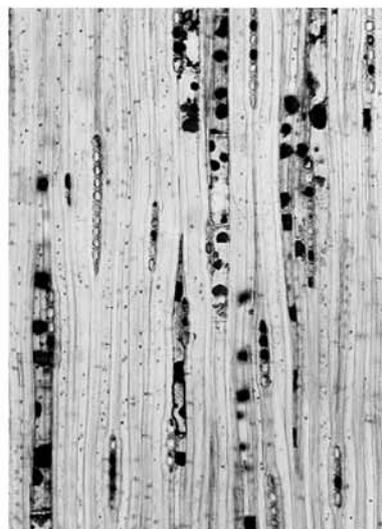
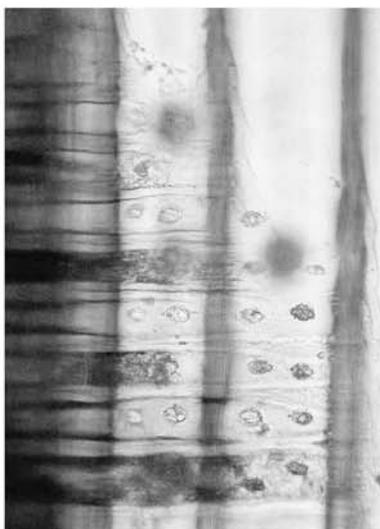
コナラ属コナラ節は、温帯を中心に広く分布する落葉高木で、日当たりの良い山野に生育する。コナラ属クスギ節は、温帯域に広く分布する落葉高木で、クスギとアベマキがあり、乾燥した台地や丘陵地に生育する。カヤとコウヤマキは、温帯ないし温帯下部の暖温帯に分布する針葉樹である。クスノキ科は温帯下部の温暖な暖温帯に分布し、照葉樹林の主要構成要素を含む常緑高木である。スギは、温帯に広く分布する針葉樹で、木理通直で大きな材が取れる良材であり、また加工工作も容易なことから建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。いずれも当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

表1 野首第1遺跡における樹種同定結果

遺物名	備考	結果 (学名/和名)	
S I 6	集石遺構炭化材	<i>Quercus sect. Aegilops</i>	コナラ属クスギ節
S I 8-3	集石遺構炭化材	<i>Torreya nucifera Sieb. et Zucc.</i>	カヤ
S I 23-1	集石遺構炭化材	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節
S I 26-13	集石遺構炭化材	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節
S I 32-4	集石遺構炭化材	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節
S I 35-8	集石遺構炭化材	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節
S I 36-19	集石遺構炭化材	<i>Fagaceae</i>	ブナ科
NK I W-894	中世低湿地炭化材	<i>Lauraceae</i>	クスノキ科
NK I W-945	中世低湿地炭化材	<i>Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.</i>	コウヤマキ
S X 3 サブトレ	不明遺構炭化材	<i>broad-leaved tree</i>	広葉樹
S C 14-495	近世土坑(茶溜?)の桶	<i>Cryptomeria japonica D. Don</i>	スギ



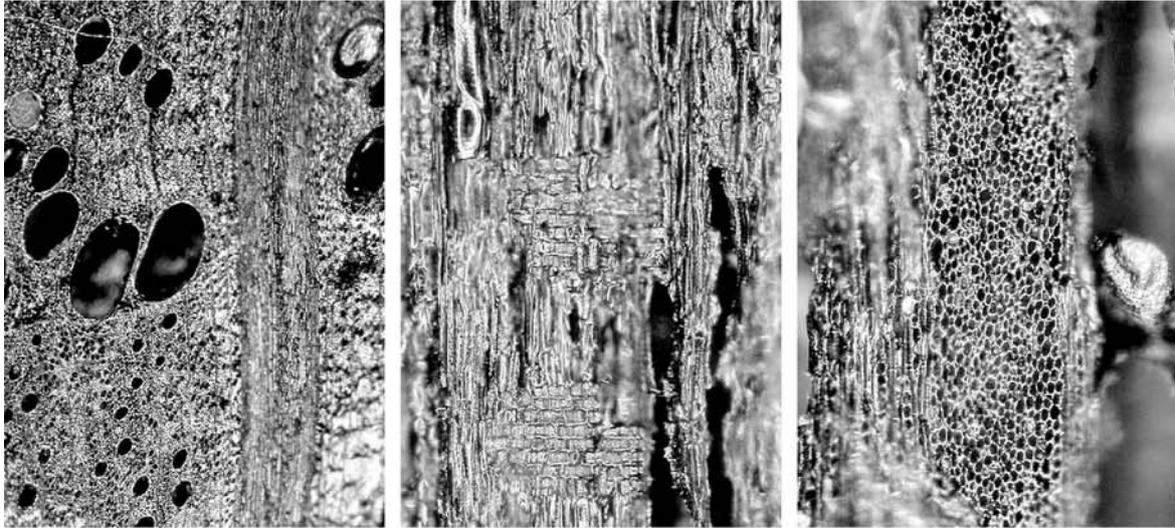
横断面 ————— : 0.4mm 放射断面 ————— : 0.1mm 接線断面 ————— : 0.1mm
 1. SI8-3 集石遺構炭化材 カヤ



横断面 ————— : 0.5mm 放射断面 ————— : 0.05mm 接線断面 ————— : 0.2mm
 2. SC14-495 近世土坑(芥溜?)の桶 スギ

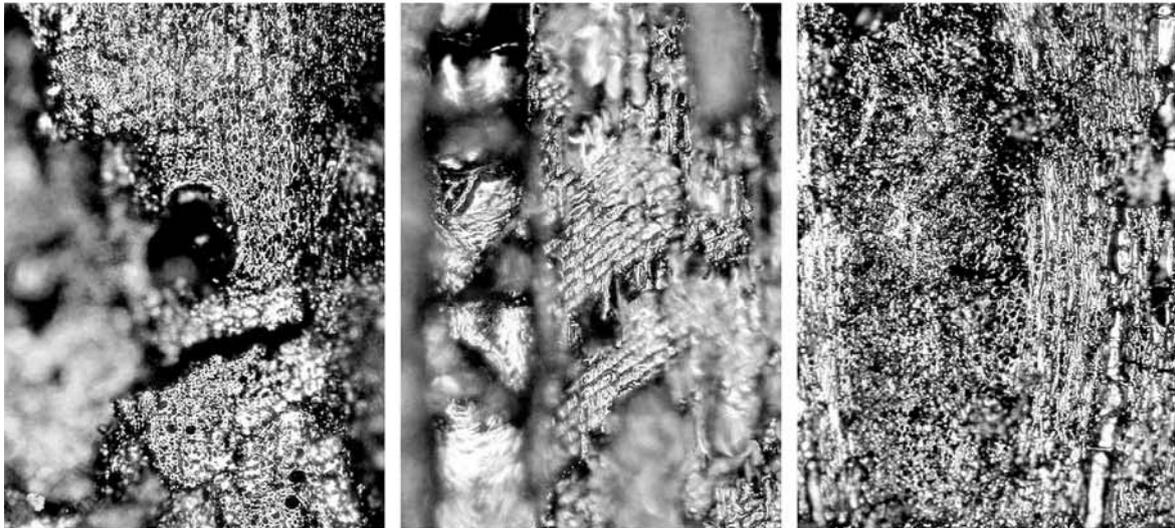


横断面 ————— : 0.4mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm
 3. NK1W-945 中世低湿地炭化材 コウヤマキ



横断面 ————— : 0.4mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm

4. SI6 集石遺構炭化材 コナラ属クヌギ節



横断面 ————— : 0.4mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.4mm

5. SI23-1 集石遺構炭化材 コナラ属コナラ節



横断面 ————— : 0.4mm 放射断面 ————— : 0.2mm 接線断面 ————— : 0.2mm

6. NK1W-894 中世低湿地炭化材 クスノキ科

Ⅲ. 野首第1遺跡における種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

2. 試料

試料は、26号集石遺構から出土した種子状の炭化物（1、2、4、5、9、10、12）である。

3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

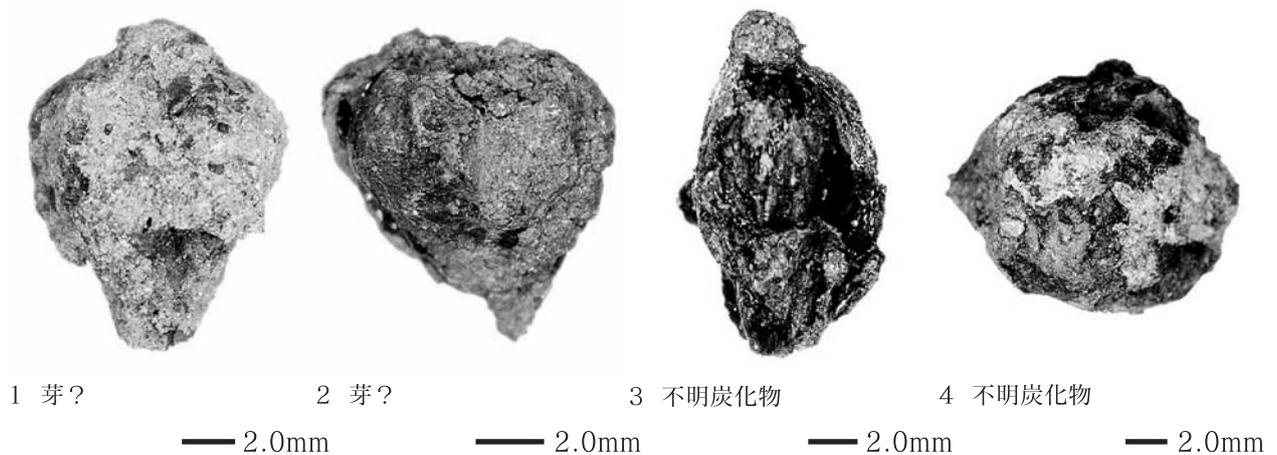
4. 結果と所見

26号集石遺構から出土した種子状の炭化物は、芽？および不明炭化物と同定された。不明炭化物は、炭化の度合いが著しく、種実の表面模様が観察できないものである。

表1 野首第1遺跡における種実同定結果

分類群	部位	SI26							
		1	2	4	5	9	10	12	
Unknown	不明炭化物	芽？	1					1	
Unknown	不明炭化物		2	1	1	3			1

野首第1遺跡の種実



Ⅳ. 糖アルコール法による木製品の保存処理

1. はじめに

遺跡などから出土した木製品を保存・展示するためには、木材の細胞内に侵入した過剰な水分を除去しながら破壊された細胞を強化する必要がある。近年、ヨーロッパではPEG（ポリエチレングリコール）にかわって、木材の構成要素でもある糖類を含浸させる方法が実用化されている。日本の高温多湿の環境や生物被害を考え、ヨーロッパで多用されているスクロース（蔗糖）に代わりラクチトールを用いることにした。これらの糖アルコールは、低吸湿性でありながら水に対する溶解性が高く、非腐朽性の性質を持ち、アリなどに食べられる生物被害も少ない。また、食品にも使用されるように、人体にとっても安全である。

2. 方法

糖アルコール含浸法は、基本的には奈良県立橿原考古学研究所の今津節生氏による処理方法を参考にして、以下の方法で行った。

- 1) 処理前に写真撮影
- 2) 静かに水に浸け、刷毛や筆などで表面の砂粒や汚れを落とす (0.02% ケーソン溶液に浸漬後水洗)
- 3) 樹種同定用の切片を採取 (表1に樹種同定結果)
- 4) 1% EDTA 溶液に一晩浸漬
- 5) 2～3日を目安に色が出なくなるまで水洗
- 6) 30% ラクチトール溶液に浸漬
- 7) 自然乾燥および加温による濃縮 (濃縮スピード 5% / 1日以内で最終濃度80%)
- 8) 含浸状況をみながら糖液よりあげ、温水洗後、粉末ラクチトールにてパウダーリング
- 9) 乾燥の後に水洗
- 10) 乾燥後、こびりついた糖を除去して仕上げ
- 11) 十分に乾燥した後に実測

3. 取扱及び保管上の注意

- 1) 取扱は、乾いた手または手袋を使用し、乱暴に扱わない。
- 2) 水が付着した場合は、素早く水分を取り除き、風通しの良い日陰で乾燥させる。
- 3) 保管場所は、室内及び通常の保管庫でよいが、高温多湿は避ける。
- 4) 長期保管は、直射日光、高温多湿、過乾燥、低温環境下にならないよう定期的に管理する。
- 5) 破損箇所の接着は、セメダインやエポキシ樹脂など、ほとんどの接着剤が使用可能である。また、欠損部分は、エポキシ樹脂のパテなどで補う。ただし、水溶性の接着剤 (木工ボンドなど) は、結晶化した木材断面が溶出するので不適切である。

表1 野首第1遺跡における樹種同定結果

試料	備考	結果 (学名/和名)	
NK1W-181	燃えさし	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属
NK1W-390	不明品	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
NK1W-464-1	扇①	<i>Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.</i>	コウヤマキ
NK1W-464-2	扇②	<i>Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.</i>	コウヤマキ
NK1W-464-3	扇③	<i>Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.</i>	コウヤマキ
NK1W-520	不明品	<i>Chamaecyparis obtusa Endl.</i>	ヒノキ
NK1W-715	クサビ?	<i>Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.</i>	コウヤマキ
NK1W-718	クサビ?	<i>Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.</i>	コウヤマキ
NK1W-836	曲物底板	<i>Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.</i>	コウヤマキ
NK1W-838・839	柄杓の柄	<i>Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.</i>	コウヤマキ
NK1W-870	板	<i>Chamaecyparis obtusa Endl.</i>	ヒノキ
NK1W-1003	柄杓の柄	<i>Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.</i>	コウヤマキ
NK1W-1006	柄杓の曲物	<i>Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.</i>	コウヤマキ
ノクピ1-1	碗	<i>Zelkova serrata Makino</i>	ケヤキ
ノクピ1-2	曲物底板	<i>Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.</i>	コウヤマキ

文献

【Ⅰ 放射性炭素年代測定】

Stuiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

【Ⅱ 樹種同定】

佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞. 木材の構造. 文永堂出版, p.20-48.

佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞. 木材の構造. 文永堂出版, p.49-100.

島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧. 雄山閣, p.296

山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成. 植生史研究特別第1号. 植生史研究会, p.242

【Ⅲ 種実同定】

笠原安夫 (1985) 日本雑草図説. 養賢堂, p.494

南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法. 東京大学出版会, p.276-283.

野首第1遺跡の保存処理中写真



1 オープン



2 使用薬品類



3 樹種同定



4 クレワット処理中



5 糖アルコール液含浸中



6 糖アルコール水洗



7 パウダーリング中



8 パウダー水洗

野首第1遺跡の保存処理前写真 I



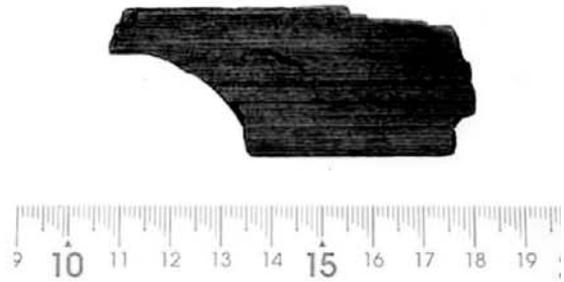
1 NK1W-181



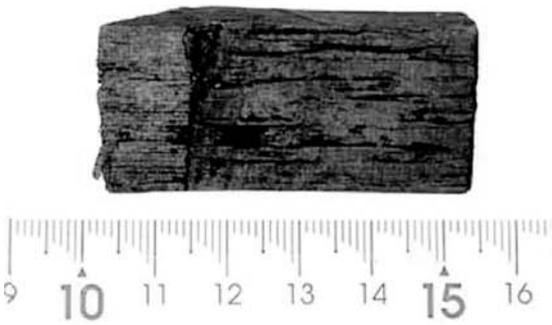
2 NK1W-390



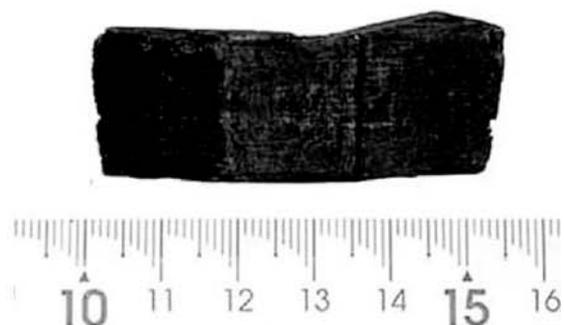
3 NK1W-464-(1-3)



4 NK1W-520



5 NK1W-715



6 NK1W-718

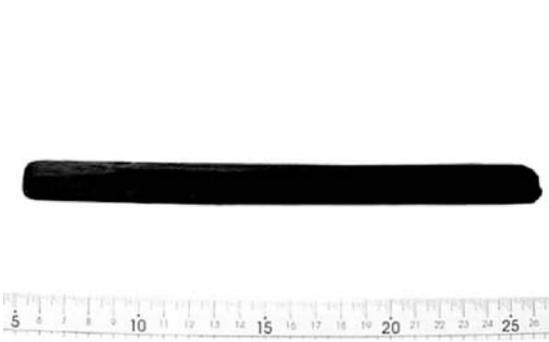


7 NK1W-836

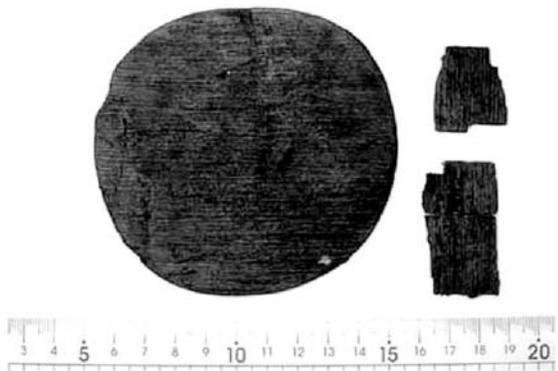


8 NK1W-870

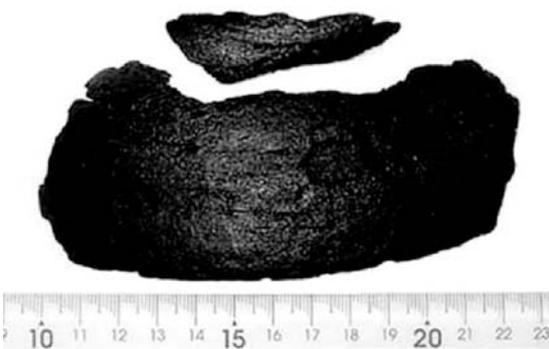
野首第1遺跡の保存処理前写真II



9 NK1W-1003



10 NK1W-1006



11 ノクビ1-1



12 ノクビ1-2

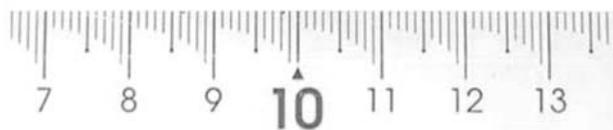


13 KN1W-838.839

野首第1遺跡の保存処理前写真Ⅲ



1 NK1W-338



2 NK1W-339



3 NK1W-748

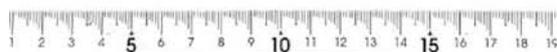


4 NK1W-752



5 NK1W-755

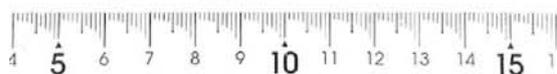
野首第1遺跡の保存処理後写真 I



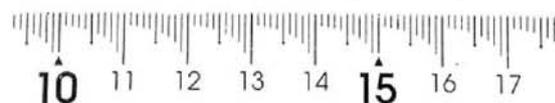
1 NK1W-181



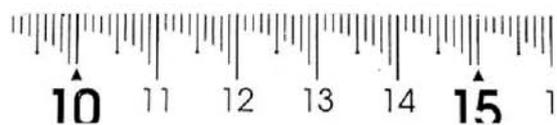
2 NK1W-390



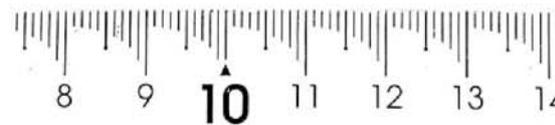
3 NK1W-464-(1-3)



4 NK1W-520



5 NK1W-715



6 NK1W-718



7 NK1W-836

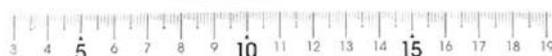
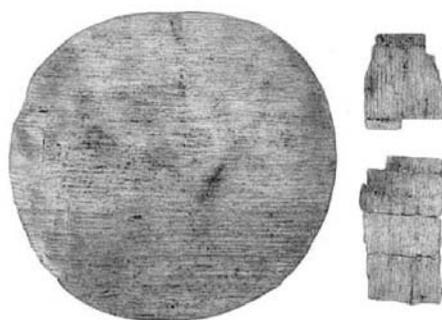


8 NK1W-870

野首第1遺跡の保存処理後写真Ⅱ



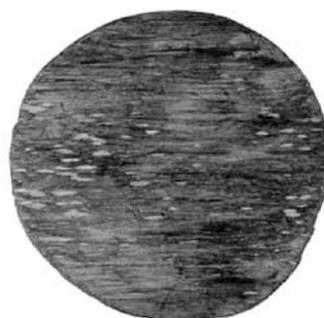
9 NK1W-1003



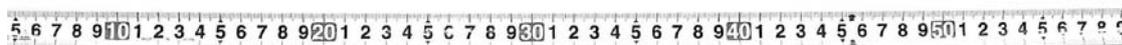
10 NK1W-1006



11 ノクビ1-1



12 ノクビ1-2

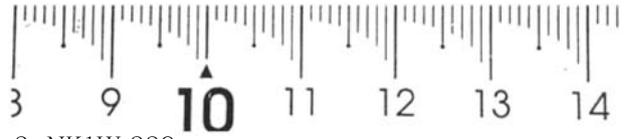


13 KN1W-838.839

野首第1遺跡の保存処理後写真Ⅲ



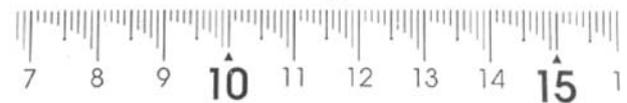
1 NK1W-338



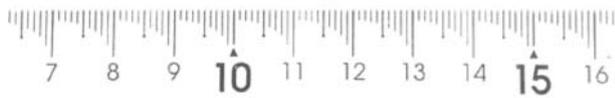
2 NK1W-339



3 NK1W-748



4 NK1W-752



5 NK1W-755

宮崎県高鍋町野首第1遺跡出土の近世人骨

松下孝幸*

【キーワード】：宮崎県、近世人骨、頭蓋、男性、下顎隆起

はじめに

宮崎県児湯郡高鍋町大字上江字野首^{のくび}に所在する野首第1遺跡の発掘調査が、東九州自動車道建設に伴い、2000年(平成12年)から実施中である。この遺跡内からは近世の墓石2基が見つかり、人骨が出土した。2基の墓石は住居敷地の北東隅に移設されていたが、墓標があった位置よりも高い崖上から台座が発見されたので、この台座付近を精査した結果、地表から浅いところで、頭蓋が検出された。墓坑を確認しながら人骨の検出を試みたが、頭蓋と肩甲骨の一部しか残っておらず、その下層からは礫が検出されたので、墓坑の確認ができなかった。

墓石にはそれぞれ弘化3年、4年(1846年、1847年)の銘が刻まれており、遺物は18世紀後半～19世紀のものが中心に出土していることから、人骨はこの時期の人骨と考えるもよさそうである。

宮崎県での近世人骨の調査例は少なく、宮崎学園都市堂地東遺跡(松下・他、1982)、小林市水落遺跡(佐伯・他、1992)、延岡市吉野第2遺跡(松下、2007)の調査・報告例があるぐらいで、その他は筆者が宮崎県史の原稿を執筆する際に鑑定した宮崎市納屋向遺跡の例があるに過ぎない。

今回出土した人骨は少量ではあるが、近世人骨の出土例が少ない宮崎県では貴重である。人骨の人類学的観察をおこなったので、その結果を報告しておきたい。

資料と所見

今回本遺跡から出土した近代人骨は1体分である。この人骨は、考古学的所見より、近世に属する人骨である。

残存していたのは頭蓋と肩甲骨の一部のみである。残存部分は第2図に示した。頭蓋は、前頭骨、後頭骨、右側の側頭骨、右側上顎骨、下顎骨である。頭蓋の骨壁は堅牢である。前頭骨の幅は狭く、頭型が長頭型に傾いていたことをうかがわせる。また、径も小さい。眉上弓の隆起はやや強いが、前頭鱗は膨隆することなく、後方へ傾斜している。外後頭隆起の発達はみられない。冠状縫合とラムダ縫合右側部の観察ができたが、両縫合とも内外両板は開離していた。右側の外耳道の観察ができたが、骨腫は認められない。

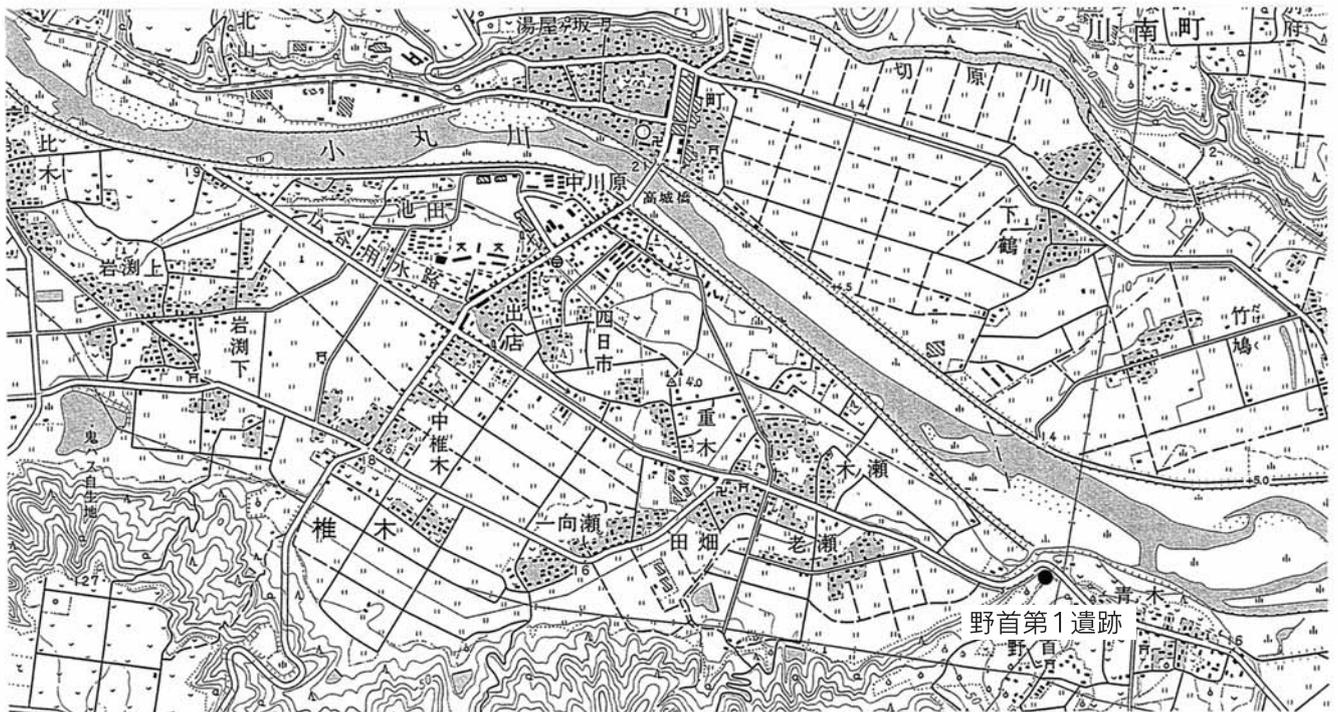
下顎骨は前頭骨の大きさに比べるとやや大きい。下顎体裏面の右側第二小白歯の位置に下顎隆起が認められた。

上顎体右側部と下顎骨には歯が定植していた。歯槽の状態と残存歯を以下に歯式で示した。

咬耗度はBrocaの1度で、エナメル質にしか咬耗が認められない。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。また、歯の咬合形式は不明である。

* Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)

(Fig. 1 Location of the Nokubi site, Takanabe Cho, Miyazaki Prefecture)

／	／	⑥	5	4	3	2	／	／	2	／	4	5	／	／	／
▼	7	6	5	4	③	②	／	／	／	／	／	／	／	／	／

〔●:歯槽閉鎖 ○:歯槽開存 ▼:先天的欠損 /:不明、番号は歯種〕

〔1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小白歯、5:第二小白歯、6:第一大白歯、7:第二大白歯、8:第三大白歯〕

肩甲骨は右側の肩甲棘の基部が残っていたに過ぎない。

性別は、頭蓋の径は小さく、外後頭隆起の発達もみられないが、眉上弓の隆起がやや強いこと、前頭鱗が後方へ傾斜していることを優先して、男性と推定した。年齢は冠状縫合とラムダ縫合右側部が内外両板とも開離していることから、壮年と思われる。なお、年齢区分は表1のとおりである。

表1 年齢区分 (Table 1.Division of age)

	年齢区分	年 齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳 (第一大白歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳 (第一大白歯萌出から第二大白歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

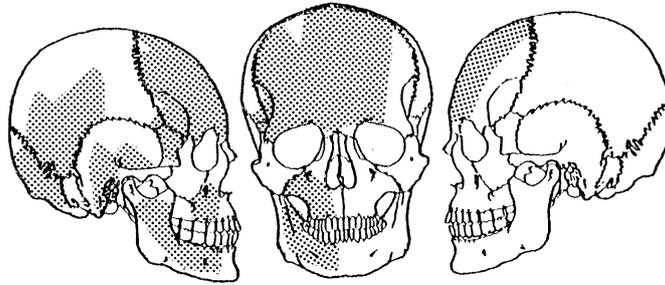
要 約

宮崎県児湯郡高鍋町大字上江字野首にある野首第1遺跡の発掘調査で、近世墓が見つかり、人骨が1体出土した。人骨の量は少なかったが、人類学的観察をおこない、以下の結果を得た。

1. 墓石は2基残存しており、それぞれ弘化3年、4年(1846年、1847年)の銘が記されていたが、人骨は1体のみしか検出することができなかった。人骨は近世に属する壮年の男性骨である。
2. 人骨の検出状況が不自然であることから、改葬された可能性がある。
3. 残存していたのは頭蓋と肩甲骨片のみであった。
4. 前頭骨の幅が狭いことから、頭型は長頭型に傾いていたと予想される。
5. 顔面骨がほとんど残っていなかったので、顔面の特徴—鼻根部の扁平性、歯槽性突顎—を確認することができなかった。また、右側第二小白歯の位置に下顎隆起が認められた。

《謝辞》

拙筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた宮崎県埋蔵文化財センターの皆様方に感謝致します。



野首第1遺跡出土頭蓋（男性・壮年）

第2図 人骨の残存部、アミかけ部分
(Fig. 2 Regions of preservation of skeleton. Shaded areas are preserved.)

《参考文献》

1. 松下孝幸・他、1982：宮崎学園都市堂地東遺跡出土の近世人骨。宮崎学園都市埋蔵文化財調査概報(Ⅲ)：47-55.
2. 松下孝幸、1997：宮崎県の古人骨。宮崎県史、通史編原始古代1：784-794.
3. 松下孝幸、2007：宮崎県延岡市吉野第2遺跡出土の近世人骨。吉野第2遺跡、宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第155集：160-163
4. 佐伯和信・他、1992：宮崎県小林市水落遺跡出土の近世人骨。小林市文化財報告書第5集：付篇1-20.



野首第1遺跡出土人骨
(男性・壮年)
(The Nokubi 1, young adult male)

縄文時代早期土器の胎土鉱物分析

1. 分析の経緯

縄文時代早期土器のうち胎土中に多数の黒色鉱物を含む個体があった(第22図93・94)。これは第IV章第3節の遺物の項でX類土器(前期末から中期に属すると考えられるもの)に含めたものである。一般的に縄文土器の胎土に角閃石が含まれることは知られているが、双眼実体顕微鏡による観察では角閃石の特徴である柱状ではなく、不定形でガラス光沢をもつ鉱物で観察の印象は黒曜石に類似していた。

延岡市山田遺跡(一般国道218号北方延岡道路建設に伴う発掘調査、当センター調査第2課が実施)においても同様な縄文土器が出土しており、胎土中の鉱物について阿蘇4火砕流堆積物中の火山ガラスおよび九州各地の黒曜石と比較するため、電子線マイクロアナライザー(EPMA)分析を実施することとなり、本遺跡の資料も合わせて分析することとした。そのため以下では山田、野首第1の両遺跡試料を分離せずに記載している。

分析は宮崎県工業技術センターに依頼した。結果の受領にあたってはEPMA分析にあたった同センターの中田一則部長から直接データの説明や概要報告を受けた。

2. 概要報告の要旨

- 1) 分析に使った試料は1mm角程度の粒子で、金コーティングして実施した。
- 2) 一般に工業試料の分析では数cm角の面を平滑に研磨してから電子線を照射するが今回の試料は不定形であり、電子顕微鏡下で平滑な部分を探して分析を実施した。その際、埋蔵文化財センターからの依頼はなかったが分析面の電子顕微鏡写真も撮影したので添付する。
- 3) サンプルNo.1(山田遺跡土器胎土中の黒色鉱物)は、不規則に発泡しており、電子線が不規則に反射していたため、複数回分析を実施し、最も信頼できると判断したデータを採用した。
- 4) 今回の分析では正確な定量分析は望めないが、珪素Si、酸素Oなど岩石に普遍的な元素に大きな差異がなければ、元素の量比はある程度、信頼できると考えてよい。
- 5) グラフデータを見る限りでは、顕著な差異は見られず、いずれのサンプルも岩石によく見られる成分が検出されている。岩石や火山灰の分析経験がないので、比較検討についてのコメントは差し控える。データの解析や検討は、埋蔵文化財センターで実施してほしい。

3. 解析と検討

前述の報告を受けて、当センターにてデータ解析を試みた。専門の研究者が蛍光X線分析等で比較に用いているSr、Rb、Zrといった微量元素は今回検出できていないため、グラフピークに差異の見られるMg、Ti、Ca、Kについて着目し、X線強度を計数した。さらにそれぞれのデータの信頼性の検討のための標準試料としてSiについても計数した。計数についてはグラフのピーク高を直接読みとり、当該する目盛り軸に対して比例配分してX線強度(単位:カウント)を算出し第1表にまとめた。解析方法は簡易の数値比較であり必ずしも正しい分析手法ではないかもしれないが、得られた情報から考察した事項を以下に記載する。

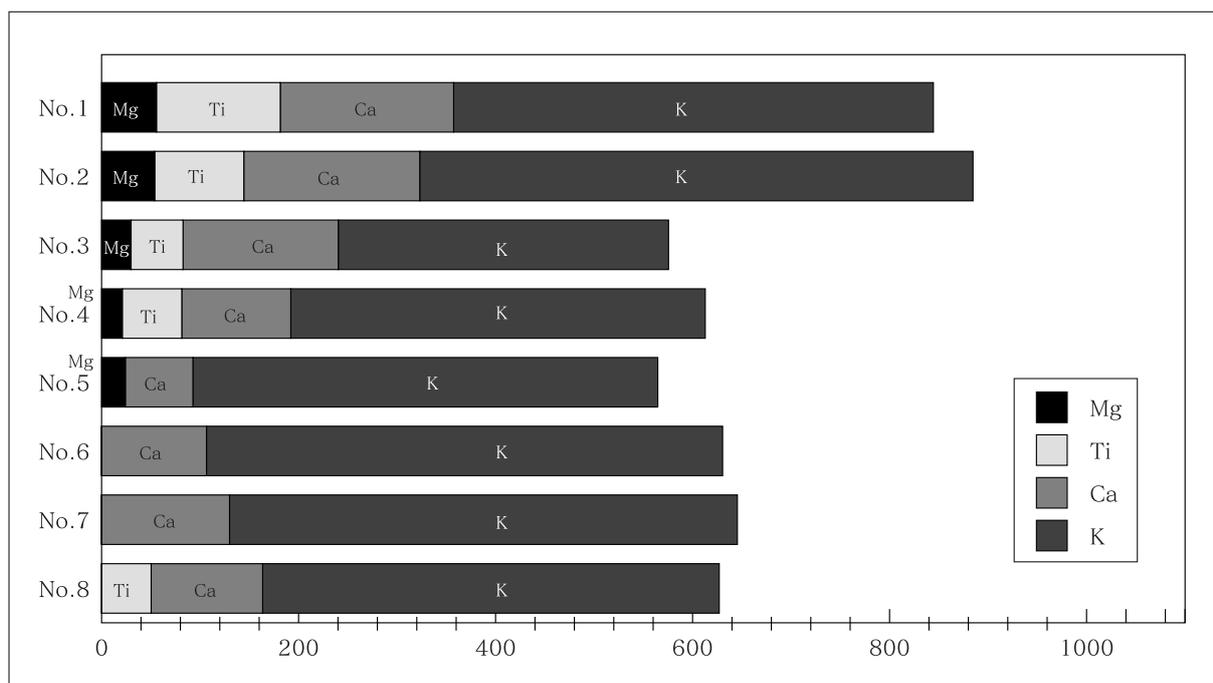
- 1) 岩石の主要成分である二酸化珪素に含まれるSiについては、ほぼ全試料で47.9~62.9の間に収まり、平均値55.6からの振れ幅は-7.7と+7.3である。この数値から成分比の検討は可能であると仮定して解析を進めた。
- 2) No.1山田遺跡土器胎土中の黒色鉱物とNo.2阿蘇4溶結凝灰岩中の黒曜石(火山ガラス)についてMg、

Ti、Ca、Kの4元素の成分含有量とその量比が他のサンプルと比較して類似点が多い。山田遺跡の基盤岩は阿蘇4溶結凝灰岩であり、現地性の高い土器である可能性が高い。No. 1とNo. 2では電子顕微鏡写真の表面構造が大きく違い、土器胎土中の鉱物の表面は著しく発泡している。このことは、溶結凝灰岩を破壊して黒色部分を意図的に混入させたものではなく、溶結凝灰岩上部の非溶結部の風化粘土層を土器作成に使用したために混入した火山ガラスである可能性が考えられる。

- 3) No. 3野首第1遺跡土器胎土中の暗灰色鉱物とNo. 4桑ノ木津留産黒曜石についてMg、Ti、Ca、Kの4元素の成分含有量とその量比が他のサンプルと比較して類似点が多い。
- 4) No. 6腰岳産黒曜石とNo. 7針尾島産黒曜石についてはMgとTiがほとんど含まれない点などに類似点が見られる。
- 5) No. 5姫島産黒曜石では、Mgがあり、Tiがない。No. 8の小国産黒曜石ではMgがなく、Tiがある。この2点は他のサンプルとの共通点がありません。

	サンプル名	Mg	Ti	Ca	K	Si
No.1	山田遺跡出土土器胎土中の黒色鉱物	55.7	125.7	176.0	487.1	53.9
No.2	阿蘇4溶結凝灰岩中の黒曜石(火山ガラス)	53.9	90.5	178.6	561.7	47.9
No.3	野首第1遺跡出土土器胎土中の暗灰色鉱物	29.9	52.8	157.6	335.3	56.9
No.4	えびの市桑の木津留産黒曜石	21.0	60.4	110.7	420.8	54.5
No.5	大分県姫島産黒曜石	24.0	0.0	68.7	472.0	56.9
No.6	佐賀県腰岳産黒曜石	0.0	0.0	106.5	524.0	61.1
No.7	長崎県針尾島産黒曜石	0.0	0.0	129.9	515.6	56.9
No.8	熊本県小国産黒曜石	0.0	50.3	113.2	463.6	62.9

第1表 主要成分のX線強度表(単位:カウント)



第1図 主要成分別X線強度比較図

報 告 書 抄 録

ふりがな	のくび だい いち いせき					
書名	野首第1遺跡Ⅱ					
副書名	東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次	50					
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	第157集					
執筆担当	堀田孝博					
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター					
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171					
発行年月日	2007年3月23日					
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
野首第1遺跡	みやざきけん 宮崎県 こゆぐん 児湯郡 たかなべちやう 高鍋町 おおあさうわえ 大字上江	32度 09分 00秒 付近	131度 29分 15秒 付近	【確認調査1】 2000.08.07～08.21 【確認調査2】 2001.12.11～12.27 【一次調査】 2002.01.15～10.30 【二次調査】 2002.11.06～2004.03.29 【三次調査】 2004.06.01～08.06	10,600㎡	東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う発掘調査
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
墳墓 集落 散布地	旧石器時代	なし		ナイフ形石器・細石刃核	丘陵下の低地に展開する縄文時代早期の集石遺構群、古墳群およびその関連建物、古代～中世の低湿地、近世～近代の屋敷跡	
	縄文時代	集石遺構		縄文土器(早期～晩期) 石鏃・石斧・石錘など		
	弥生時代	なし		弥生土器(前期～後期)		
	古墳時代	竪穴建物跡 墓道?		土師器・須恵器 鉄鏃・石錘など		
	古代～中世	低湿地		中国産磁器・国産陶器 土師器・木製品		
近世～近代	建物跡 土塁 石垣 土坑(廃棄坑)		中国産磁器・国産陶磁器・土製人形・銭貨・石製品・サンゴなど			

圖 版



野首古墳群全景（南より）

小丸川に向かって突き出した丘陵の南東側斜面に2基の古墳が発見された。いずれも尾鈴山酸性岩類の円礫を用いた横穴式石室を備えている。丘陵上部と低地との比高差は約10mあり、石室へ入るためには斜面を登っていく必要があった。



1・2号竪穴建物跡（南西より）

横穴式石室開口部の真下に位置する建物跡である。右奥の2号竪穴建物跡では埋土の中位で焼土を含むピットや破砕されたかのような須恵器が見られたため、自然埋没の過程における二次利用が想定される。



B区縄文時代調査状況（東より）



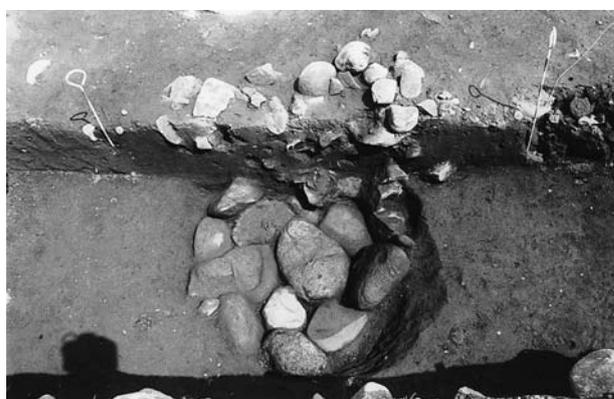
A区VIb層散礫検出状況（南東より）



2号集石遺構（東より）



16号集石遺構（南西より）



23号集石遺構（南西より）



26号集石遺構（南東より）



27号集石遺構（北より）

図版4



29号集石遺構（北より）



30号集石遺構（北西より）



34号集石遺構（北東より）



35号集石遺構（北より）



36号集石遺構（南東より）



38号集石遺構（北西より）



A区縄文時代調査終了状況（南より）



1号竪穴建物跡 (南より)



1号竪穴建物跡土器埋設炉 (北東より)



2号竪穴建物跡土器埋設炉 (北東より)



4号性格不明遺構ピット (北東より)



9号性格不明遺構ピット (北東より)



6~8号性格不明遺構検出状況 (西より)



8号性格不明遺構調査状況 (南より)



古墳群前調査終了状況 (南西より)

図版6



B区木製品出土状況（北より）



B区低湿地層および河床礫（北より）



近世屋敷跡全景（北東より）



1号石垣（東より）



1号石垣断面（1）（南より）



1号石垣断面（2）（南より）



平場C造成土断面（南より）



土塁断面（南東より）



1号石列 (西より)



3~5号石垣 (北より)



近世墓標 (南より)



近世墓坑完掘状況 (北東より)



近世墓人骨検出状況 (東より)



11号土坑 (南東より)



30号土坑 (北東より)

図版8



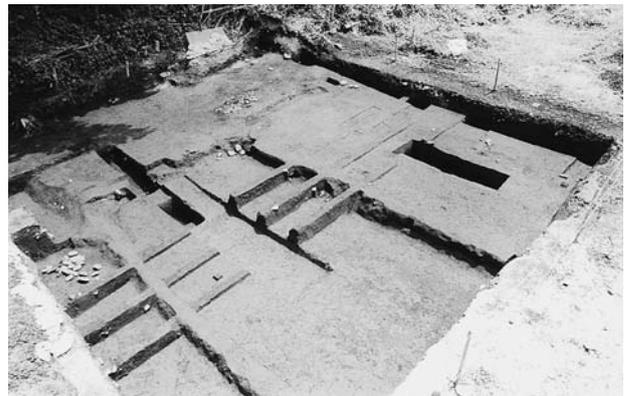
61号土坑礫検出状況（北より）



61号土坑獣骨等検出状況（北より）



11号性格不明遺構（東より）



水田跡（北より）



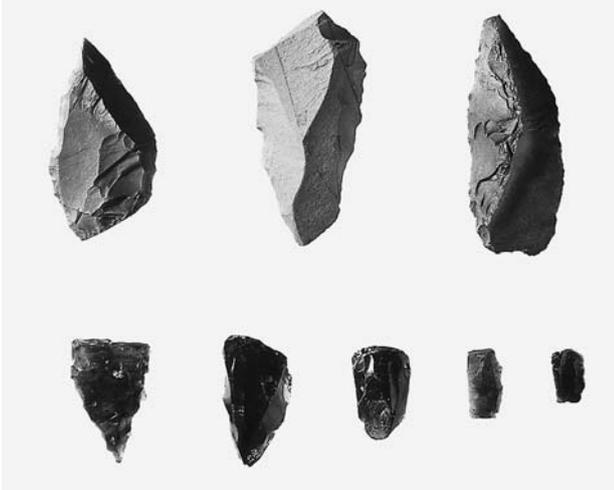
3号性格不明遺構検出状況（南より）



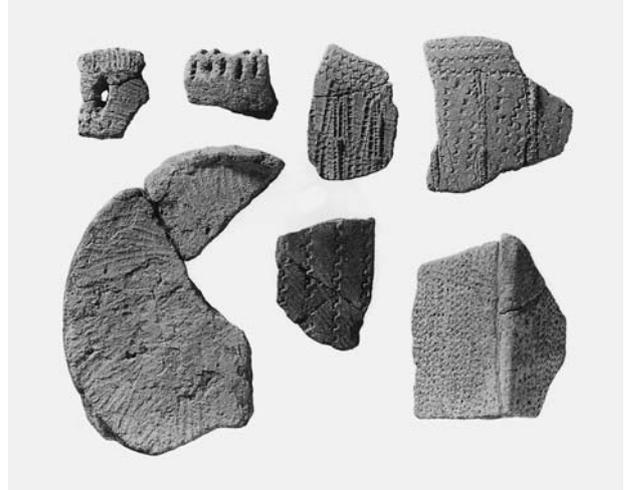
集石遺構の礫計量風景



3号性格不明遺構完掘状況（南東より）



旧石器 (1~8)



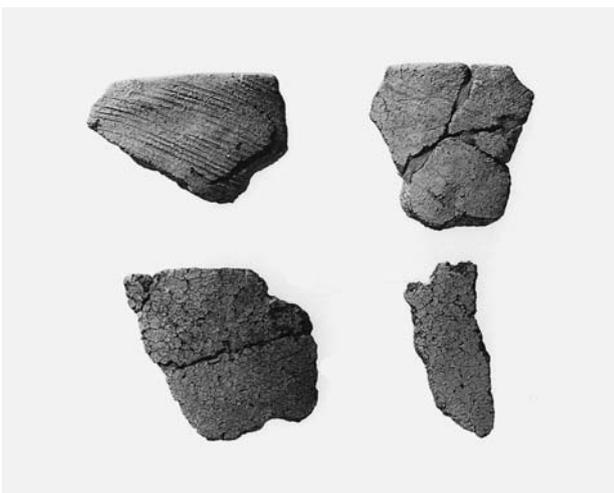
縄文土器 (9~15)



縄文土器 (16~18)



縄文土器 (19~23)

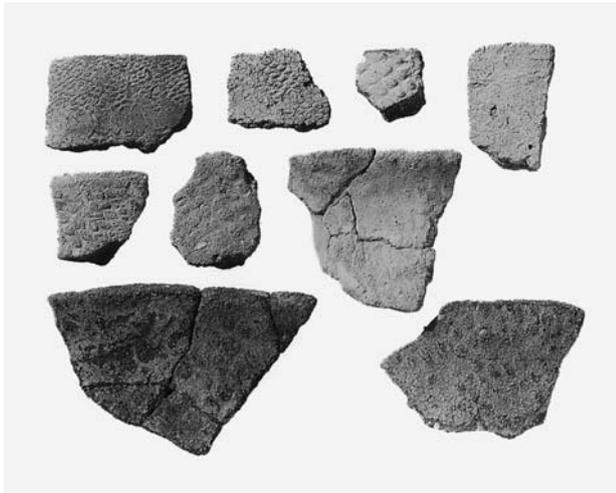


縄文土器 (24~27)

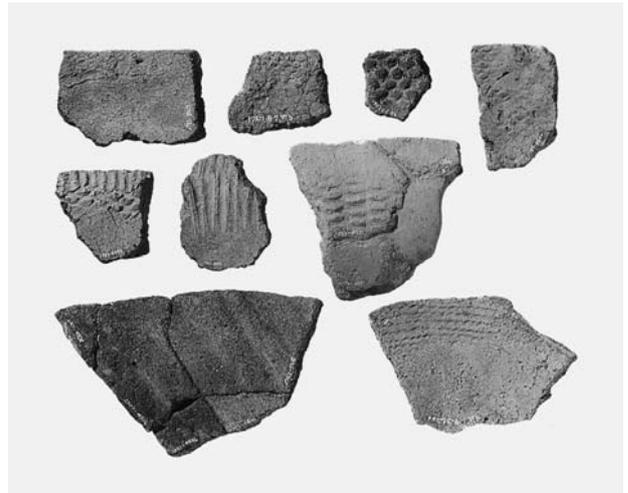


縄文土器 (28~33)

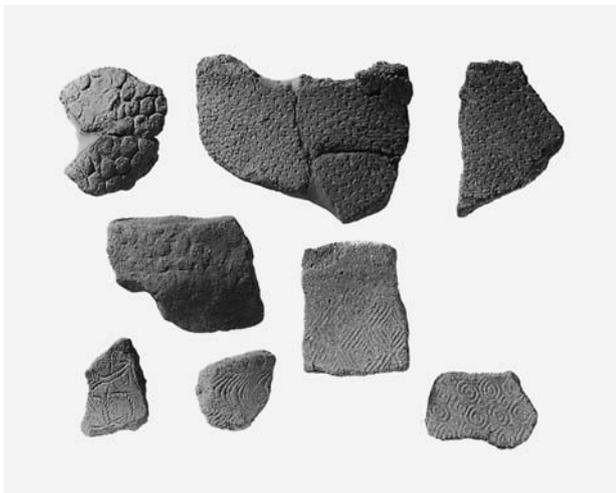
図版10



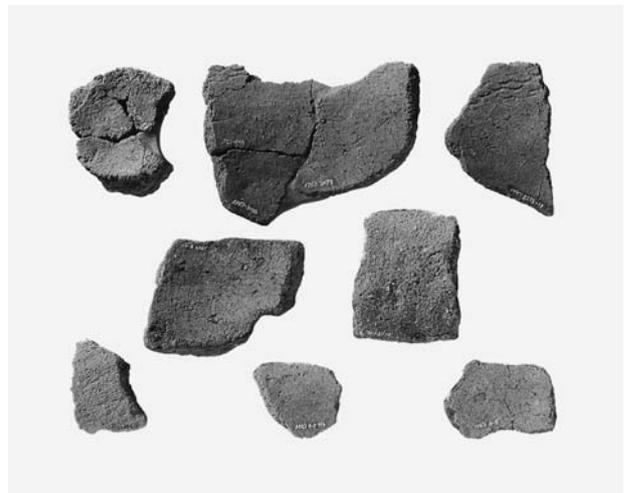
縄文土器 (34~42 : 外面)



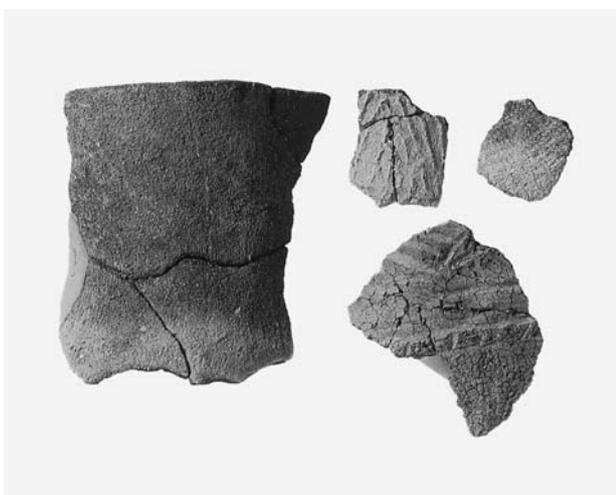
縄文土器 (34~42 : 内面)



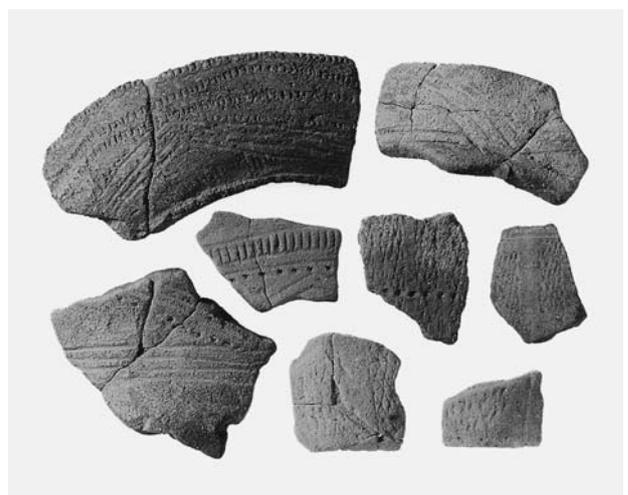
縄文土器 (43~48・50・51 : 外面)



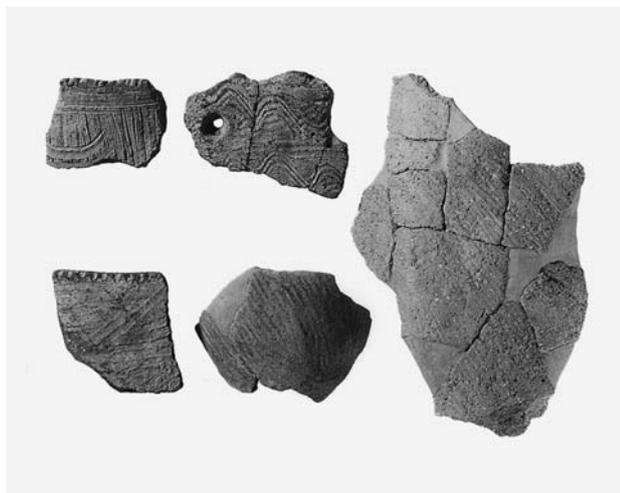
縄文土器 (43~48・50・51 : 内面)



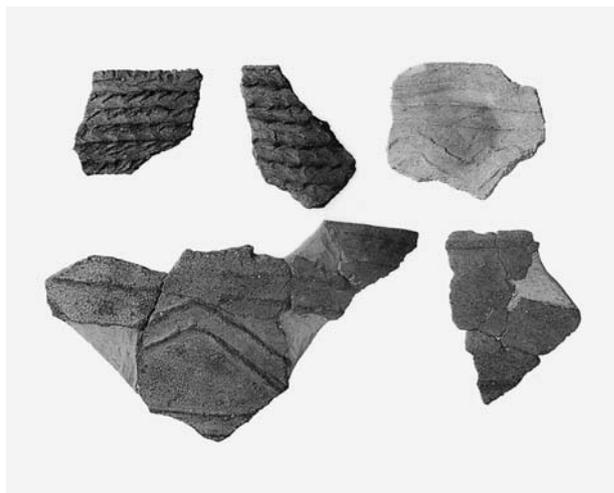
縄文土器 (49・52~54)



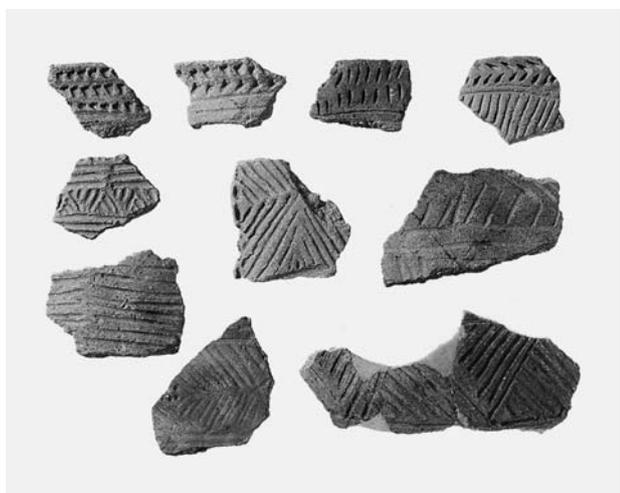
縄文土器 (55~62)



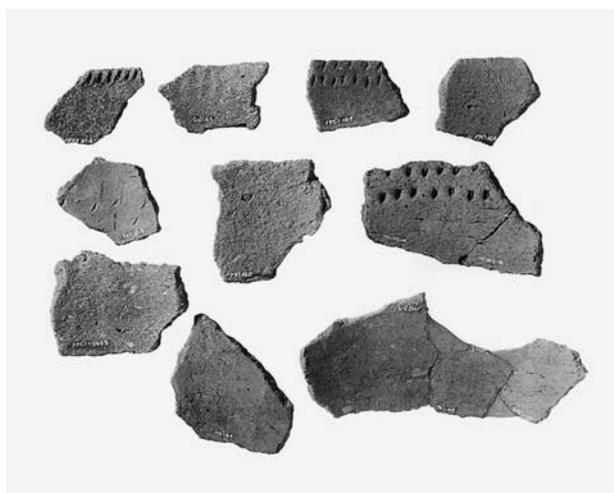
縄文土器 (63~67)



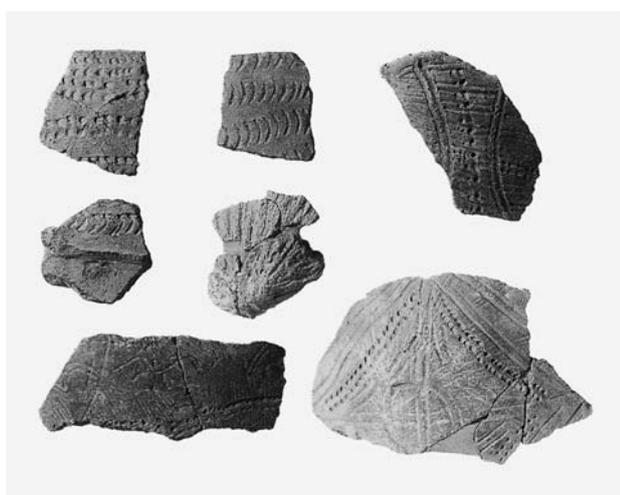
縄文土器 (68~72)



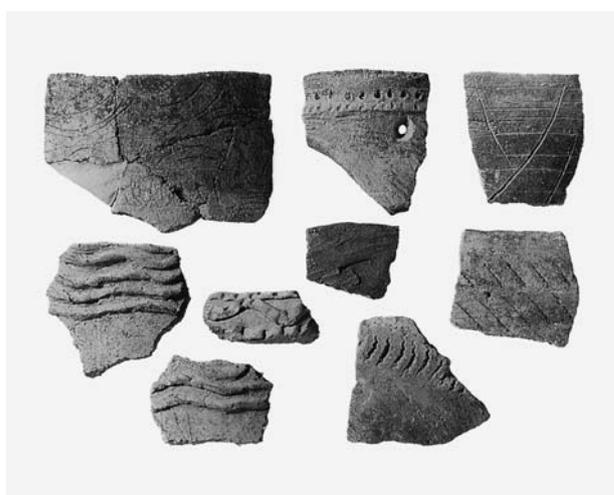
縄文土器 (73~82 : 外面)



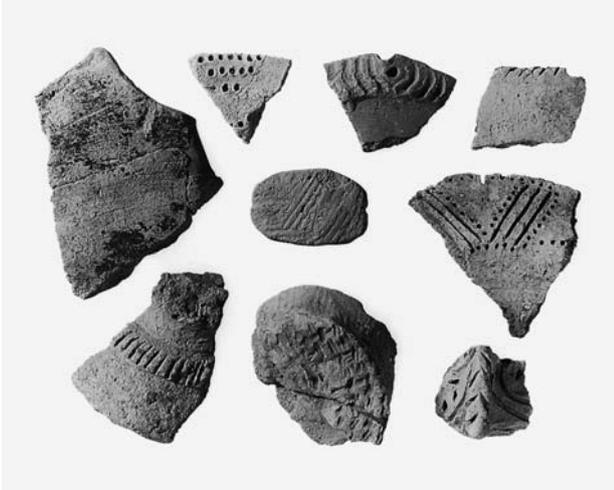
縄文土器 (73~82 : 内面)



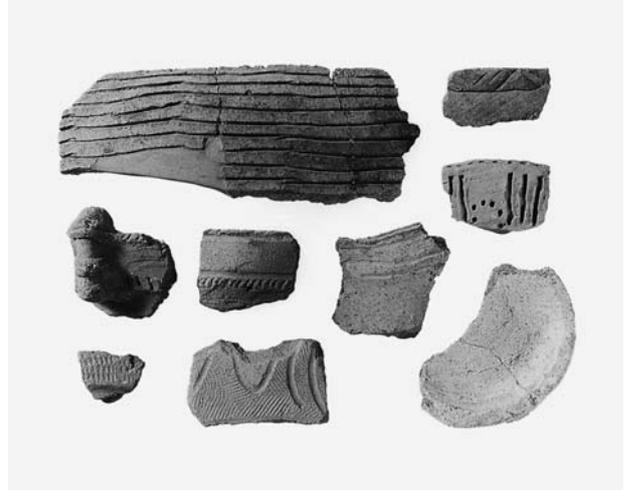
縄文土器 (83~89)



縄文土器 (90~98)



縄文土器 (99~107)



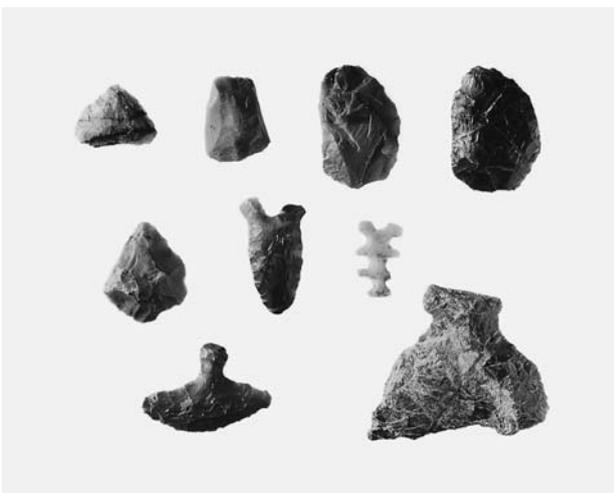
縄文土器 (108~116)



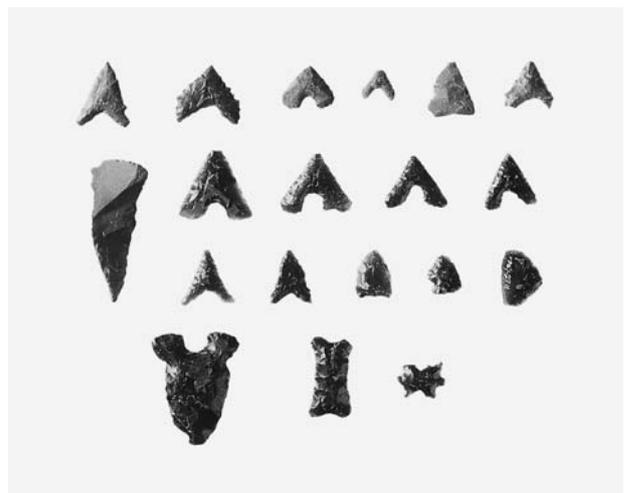
縄文土器 (117~123)



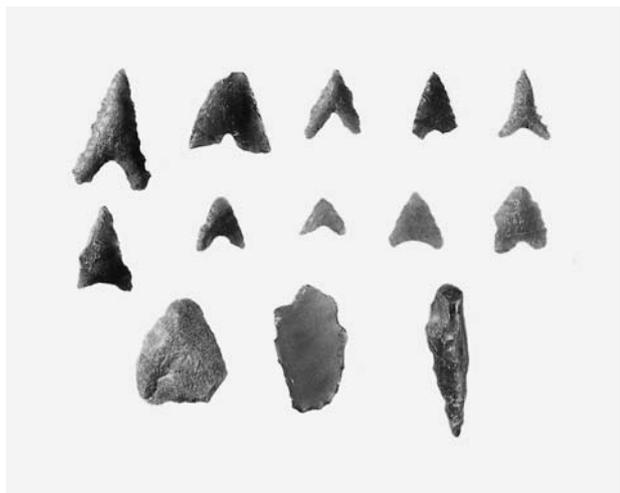
縄文石器 (124~135)



縄文石器 (136~144)



縄文石器 (145~163)



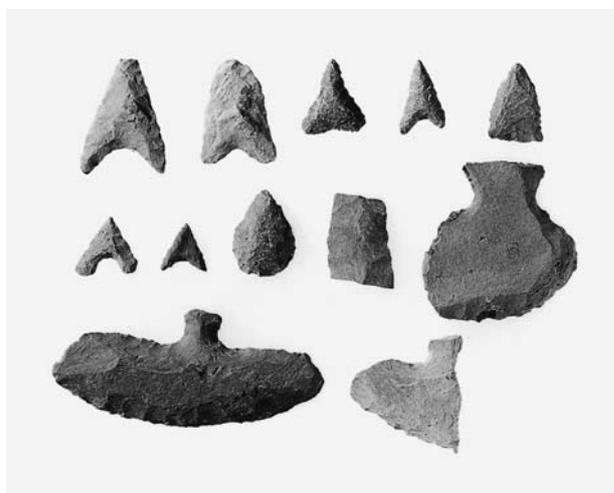
縄文石器 (164~176)



縄文石器 (177~179)



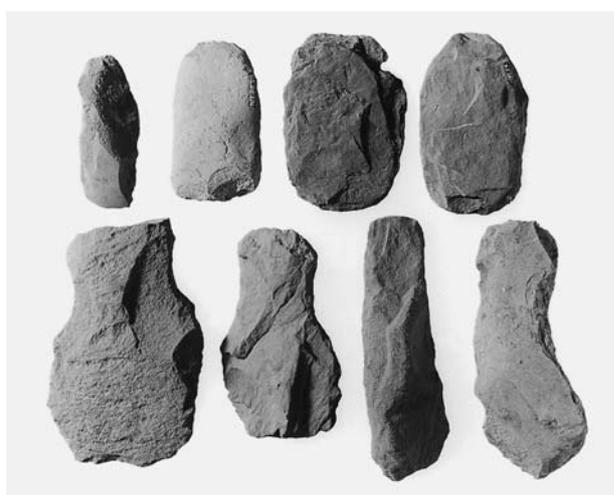
縄文石器 (180~191)



縄文石器 (192~203)



縄文石器 (204~212)



縄文石器 (213~220)

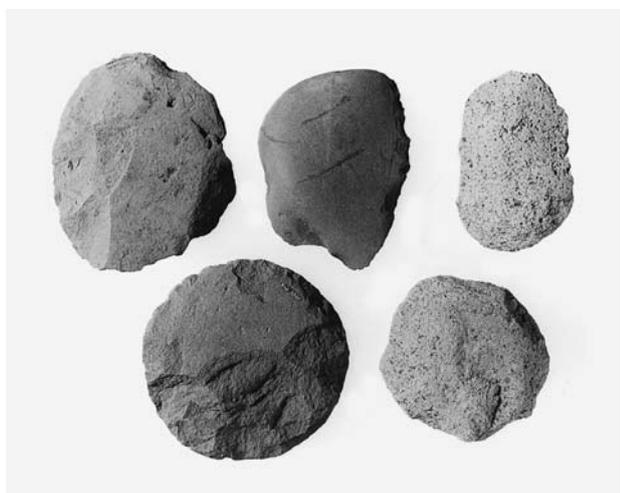
図版14



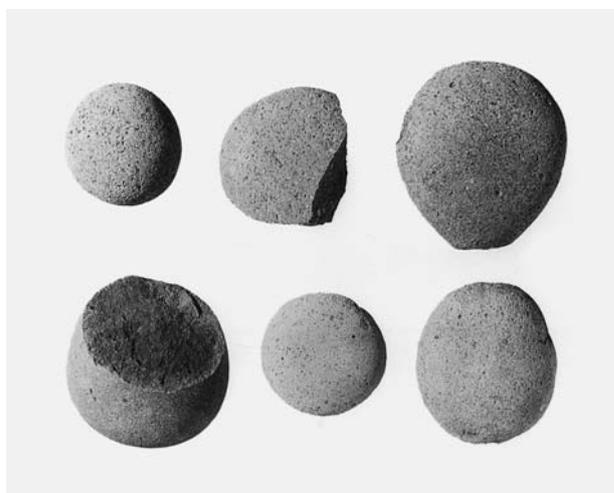
縄文石器 (221~225・232・233)



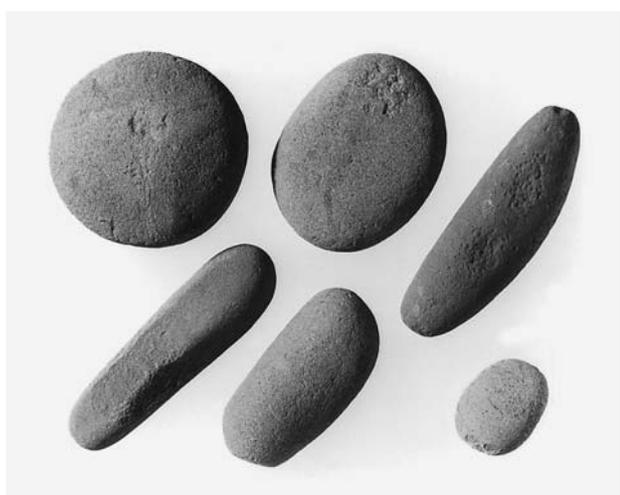
縄文石器 (226~231)



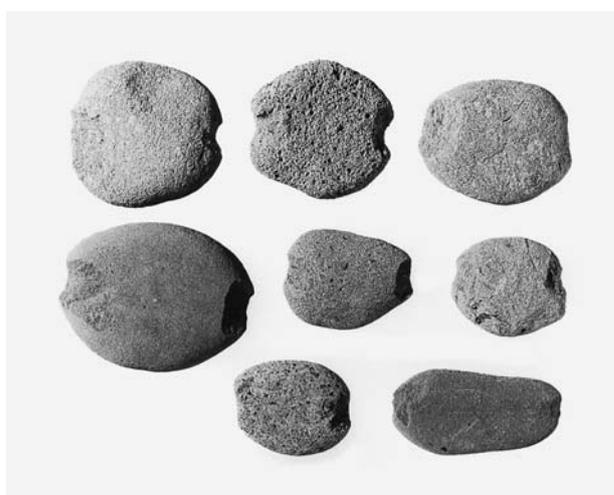
縄文石器 (234~238)



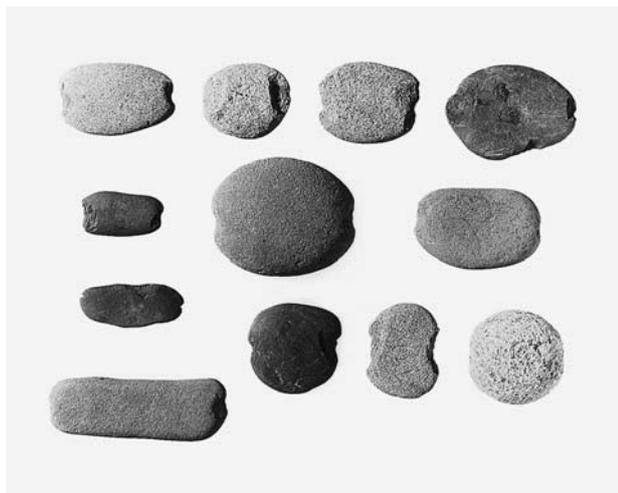
縄文石器 (239~244)



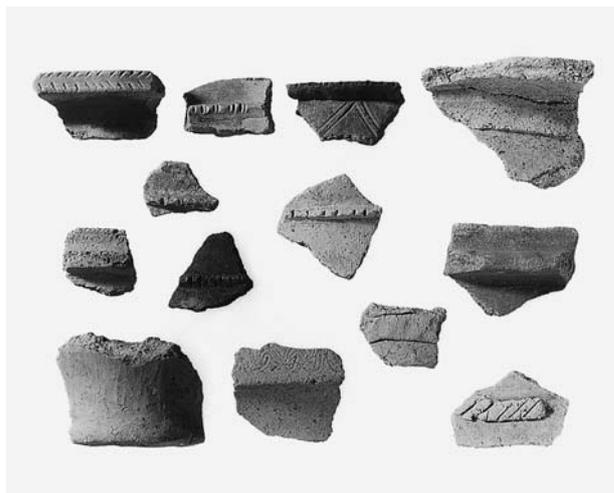
縄文石器 (245~250)



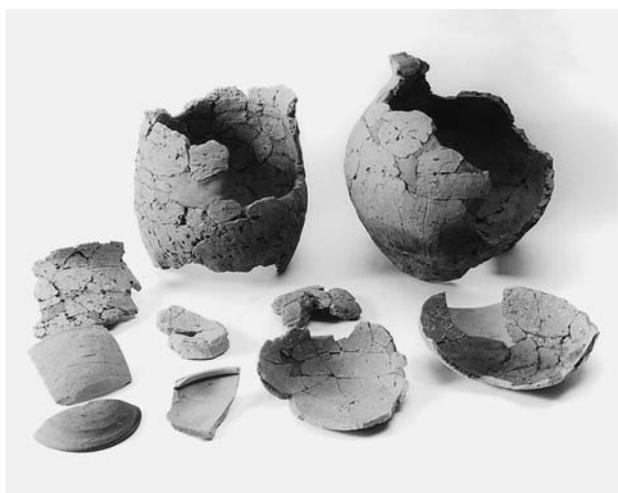
縄文石器 (251~258)



縄文石器 (259~270)



弥生土器 (271~283)



1号竪穴建物跡出土遺物 (284~293)



1号竪穴建物跡出土遺物 (295~306)



2号竪穴建物跡出土遺物 (307~314)



長頸壺 (308) の破碎痕跡



4・9号性格不明遺構出土遺物 (315~317)



5号性格不明遺構出土遺物 (318~325)



5号性格不明遺構出土遺物 (326~334)



6~8号性格不明遺構出土遺物 (335~343)



7~12号性格不明遺構出土遺物 (344~352)



A区土師器集中出土遺物 (353~359)



B区低湿地層出土遺物 (360~371)



その他古墳時代遺物 (372~384)



その他古墳時代遺物 (385~395)

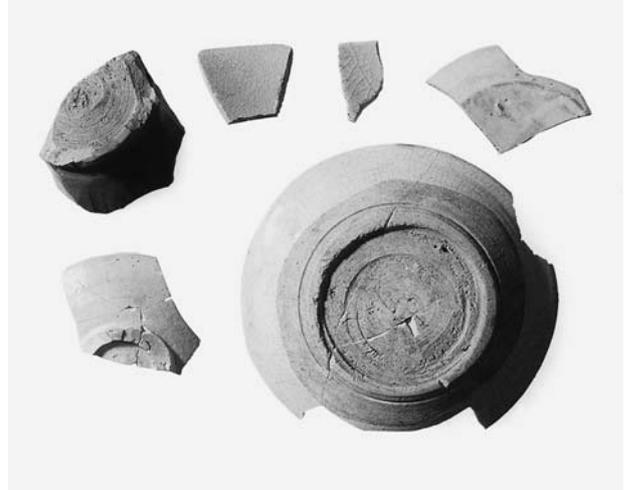


古代土器 (396~398および製塩土器)

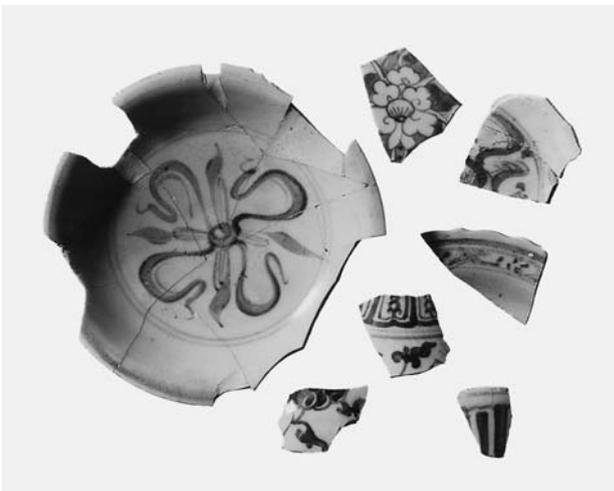
図版18



中国産青磁・白磁 (399~404 : 文様等)



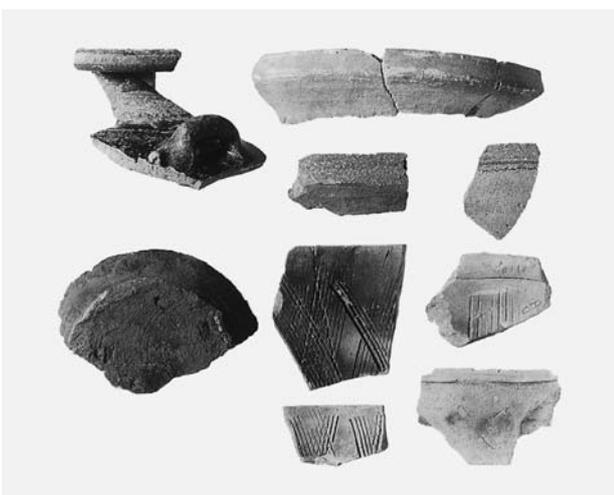
中国産青磁・白磁 (399~404 : 高台等)



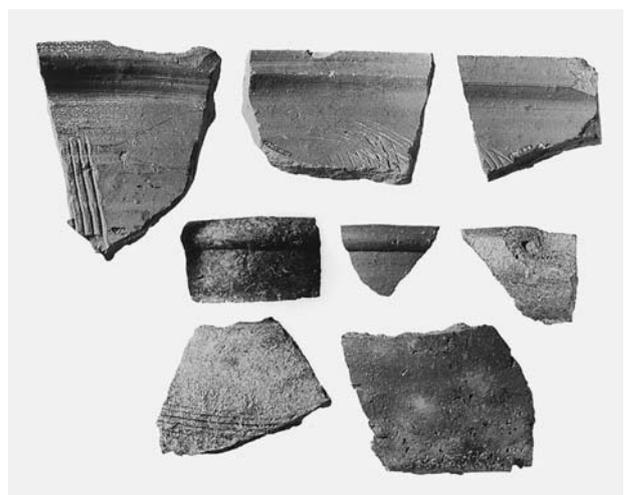
中国産青花 (405~411 : 文様等)



中国産青花 (405~411 : 高台等)



中世陶器類 (412~416・425~428)



中世陶器類 (417~424)



古代～中世土器 (429～437)



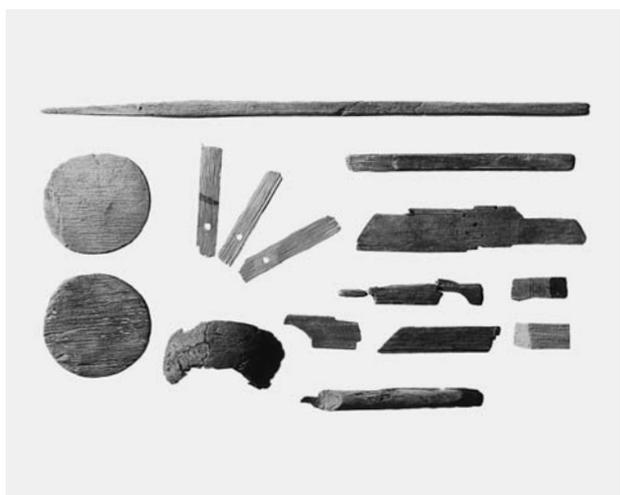
古代～中世土器 (438～447)



古代～中世土器 (448～457)



古代～中世土器 (458～467)



古代～中世木製品 (468～482)



中世石製品 (483～484)



14号土坑出土陶磁器 (490~505)



22号土坑出土陶磁器 (506~510)



23~25号土坑出土陶磁器 (511~515)



26·27号土坑出土陶磁器 (516~534)



30号土坑出土陶磁器 (535~559)



61号土坑出土陶磁器 (560~580)



10~12号土坑出土遺物 (485~489)



近世墓出土陶磁器 (592)



34・65・66号土坑、近世墓出土陶磁器 (581~591)



1号溝状遺構、屋敷入口出土陶磁器 (593~605)



土壘出土陶磁器 (606~631)



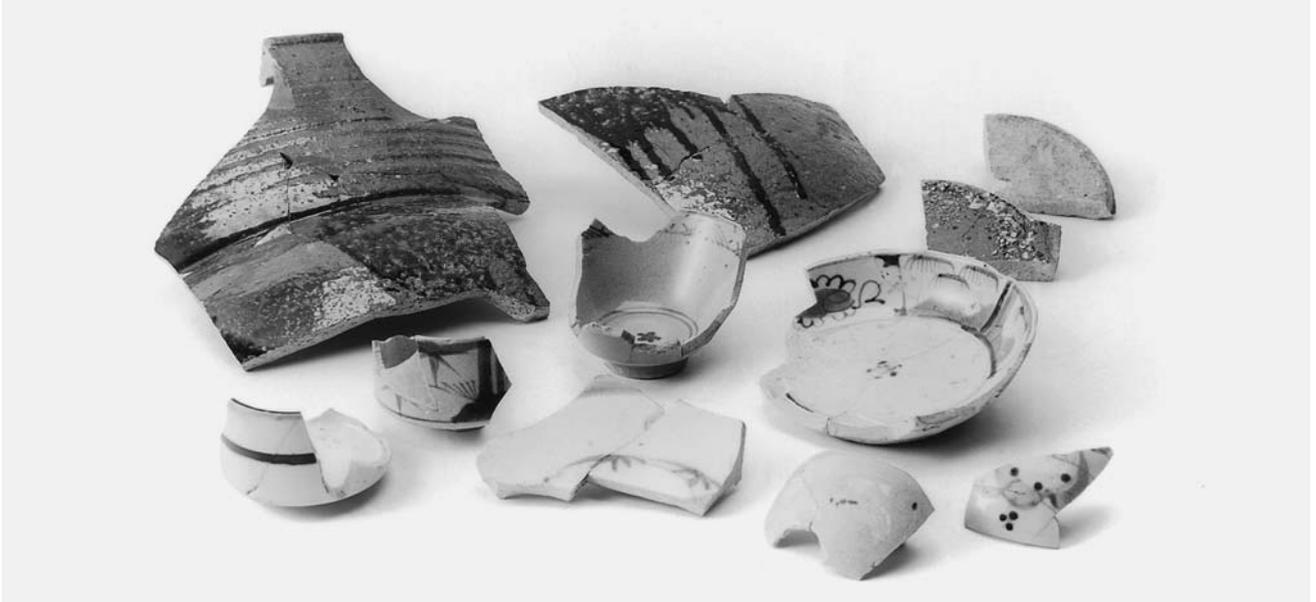
土壘出土陶磁器 (632~644・647~649)



土壘出土陶磁器 (645・646)



その他遺構出土陶磁器 (675~677)



1・11号性格不明遺構出土陶磁器 (650~657)



その他遺構出土陶磁器 (658~674)



その他遺構出土陶磁器 (678~684)



水田跡下層出土陶磁器 (705)



水田跡下層出土陶磁器 (685~704)



遺構外出土陶磁器 (722~730)



遺構外出土陶磁器 (706~721)



近世~近代土製品 (735~744)



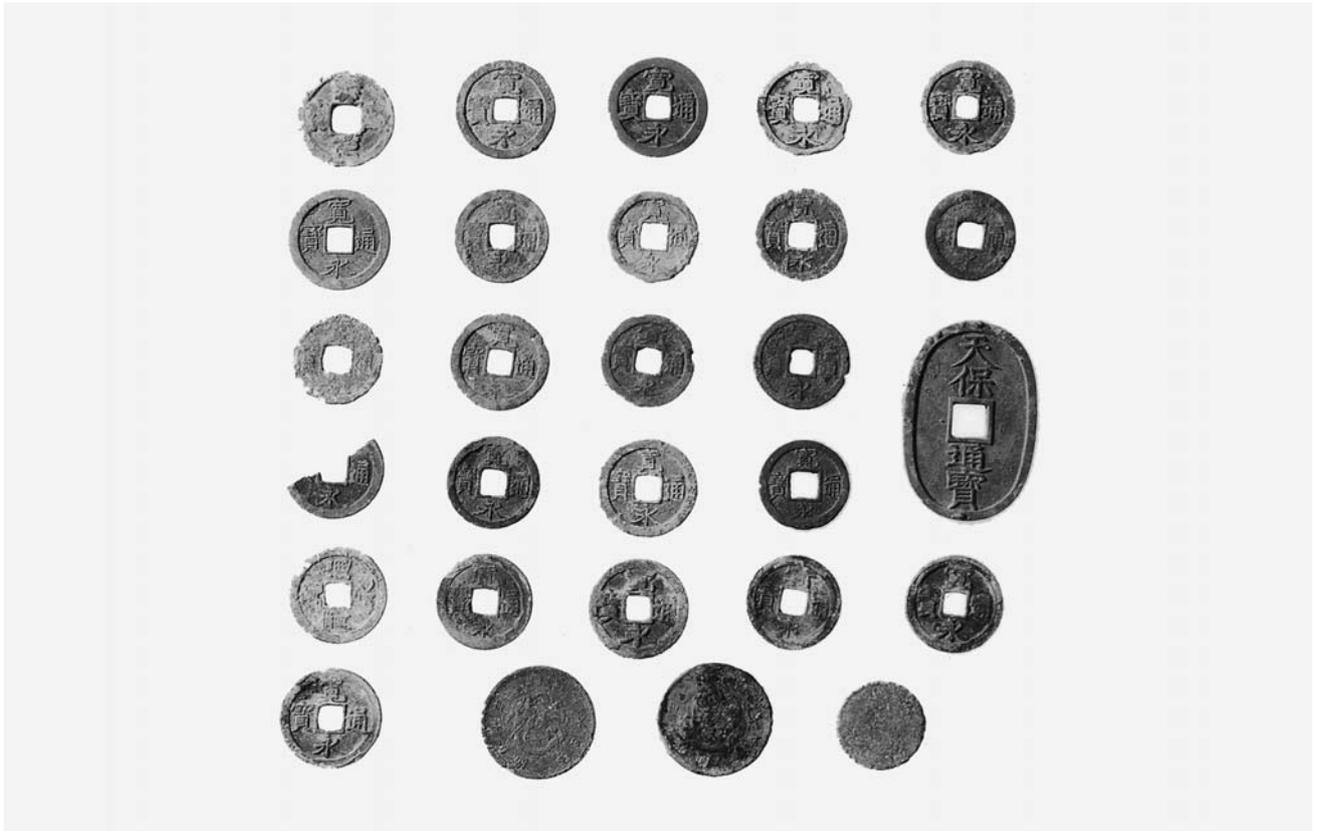
近世~近代瓦 (745~749)



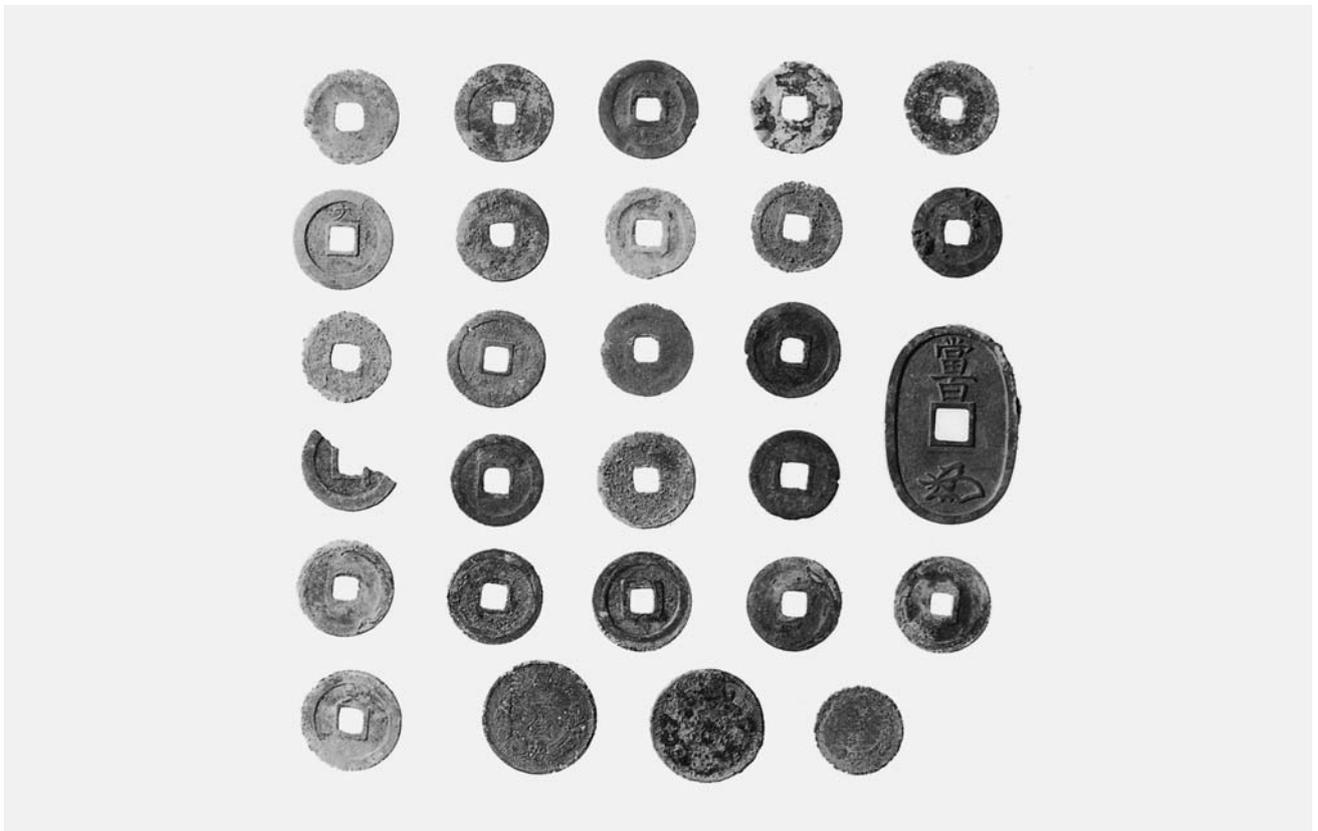
近世~近代瓦 (750~754)



近世~近代瓦 (755~760)



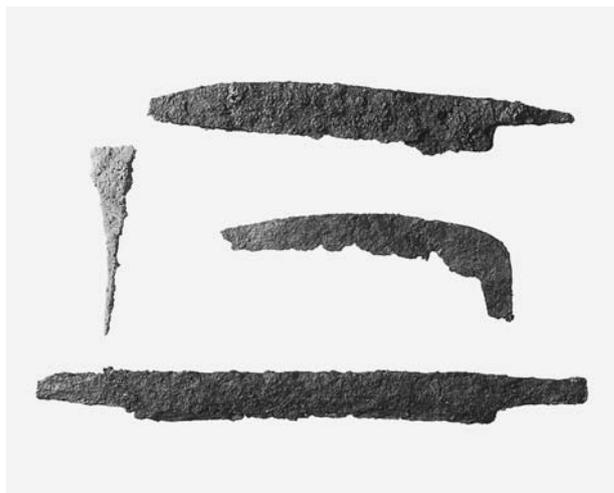
中世～近代銭貨（780～807：面）



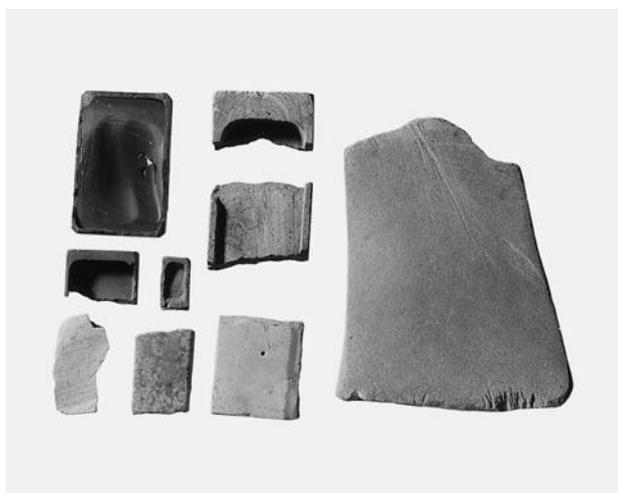
中世～近代銭貨（780～807：背）



近世～近代銅製品等 (761～776)



古墳時代鉄鏃 (294) ・
近世～近代鉄製品 (777～779)



近世～近代硯・砥石 (808～816)



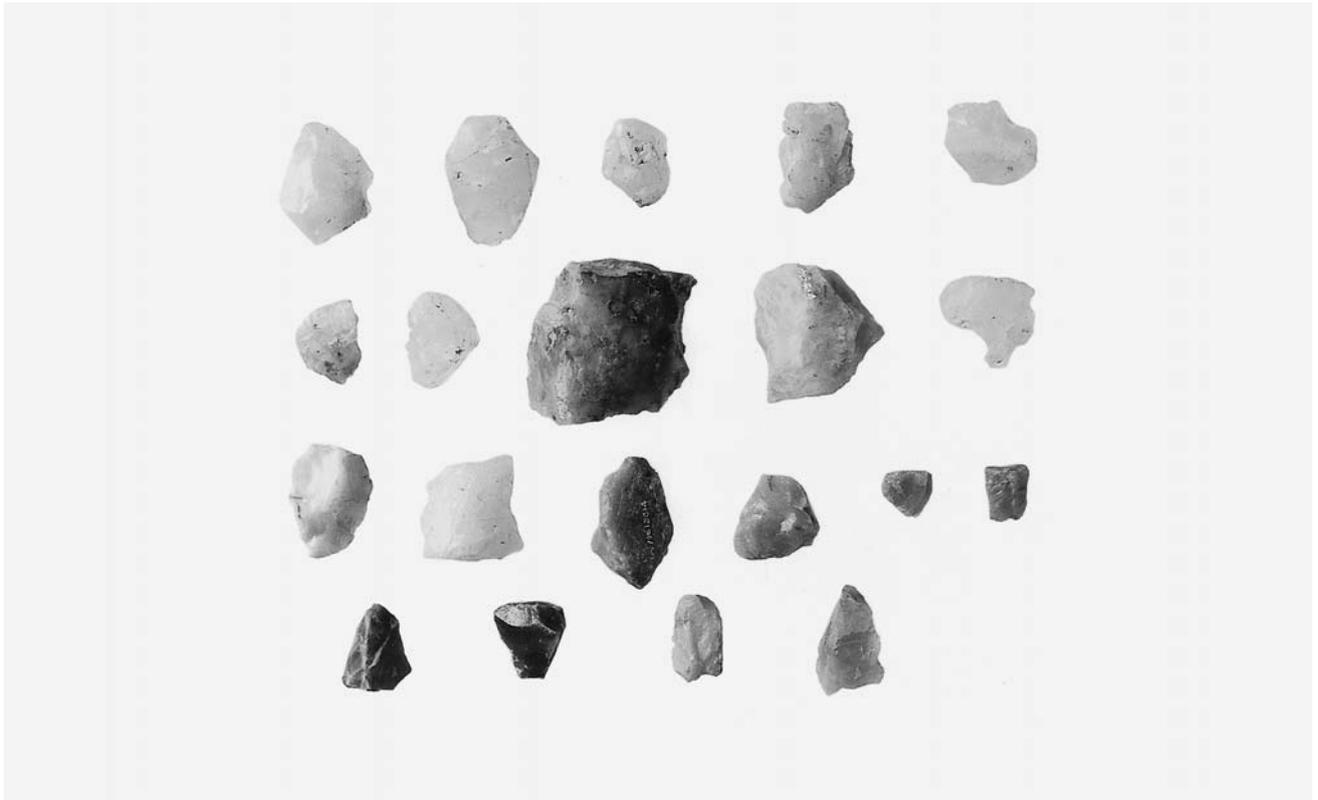
近世墓台座 (838)



姫島産黒曜石の石核 (837) ・土錘 (839～841)



玉類 (842～844)



近世～近代火打石 (817～836)



遺跡出土のサンゴ

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第157集

野首第1遺跡II

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書50

2007年3月23日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985 (36) 1171 FAX 0985 (72) 0660

印刷 株式会社 宮崎南印刷
〒880-0911 宮崎市大字田吉350-1
TEL 0985 (51) 2745 FAX 0985 (52) 2682
